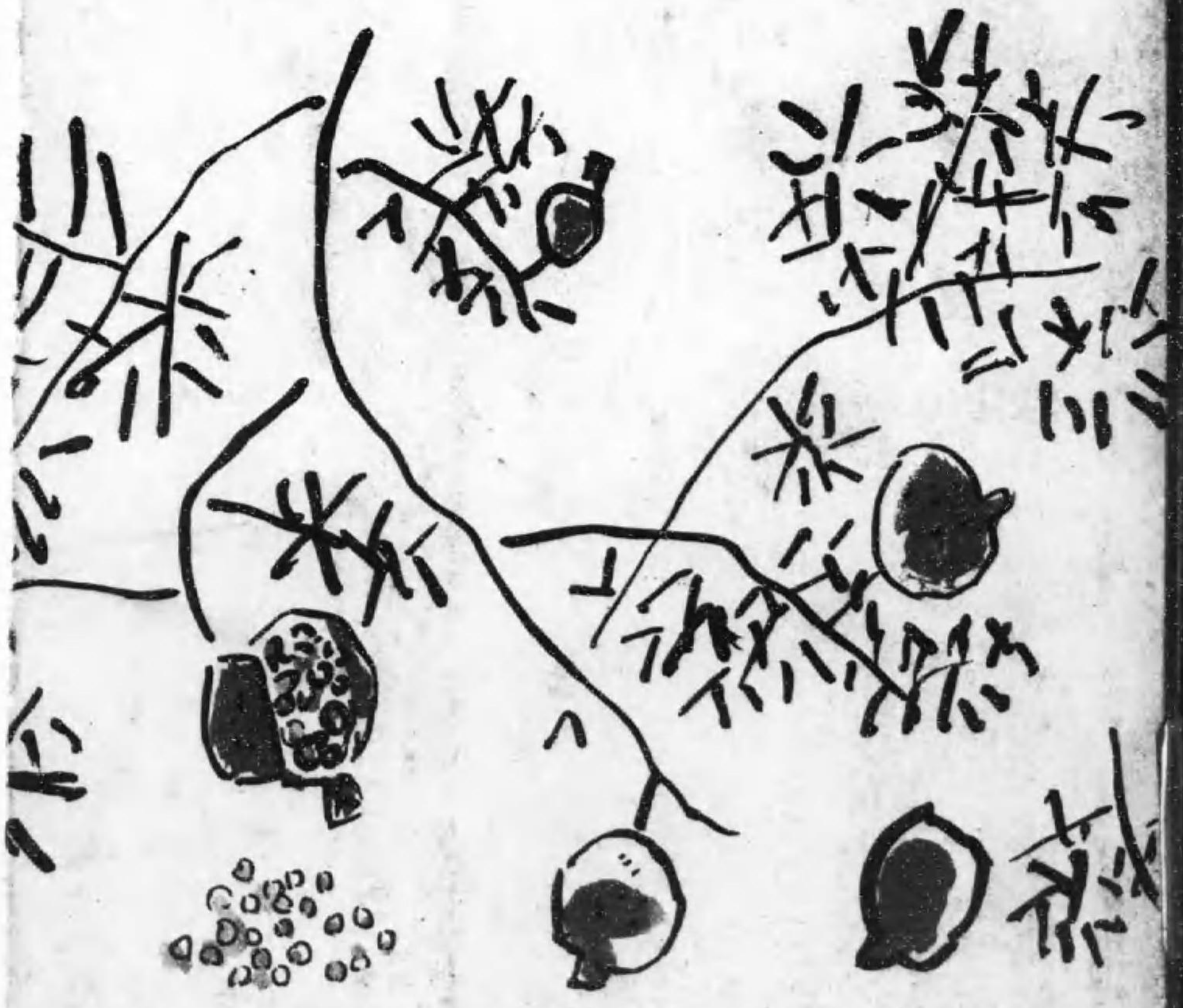


新茗草詩歌集

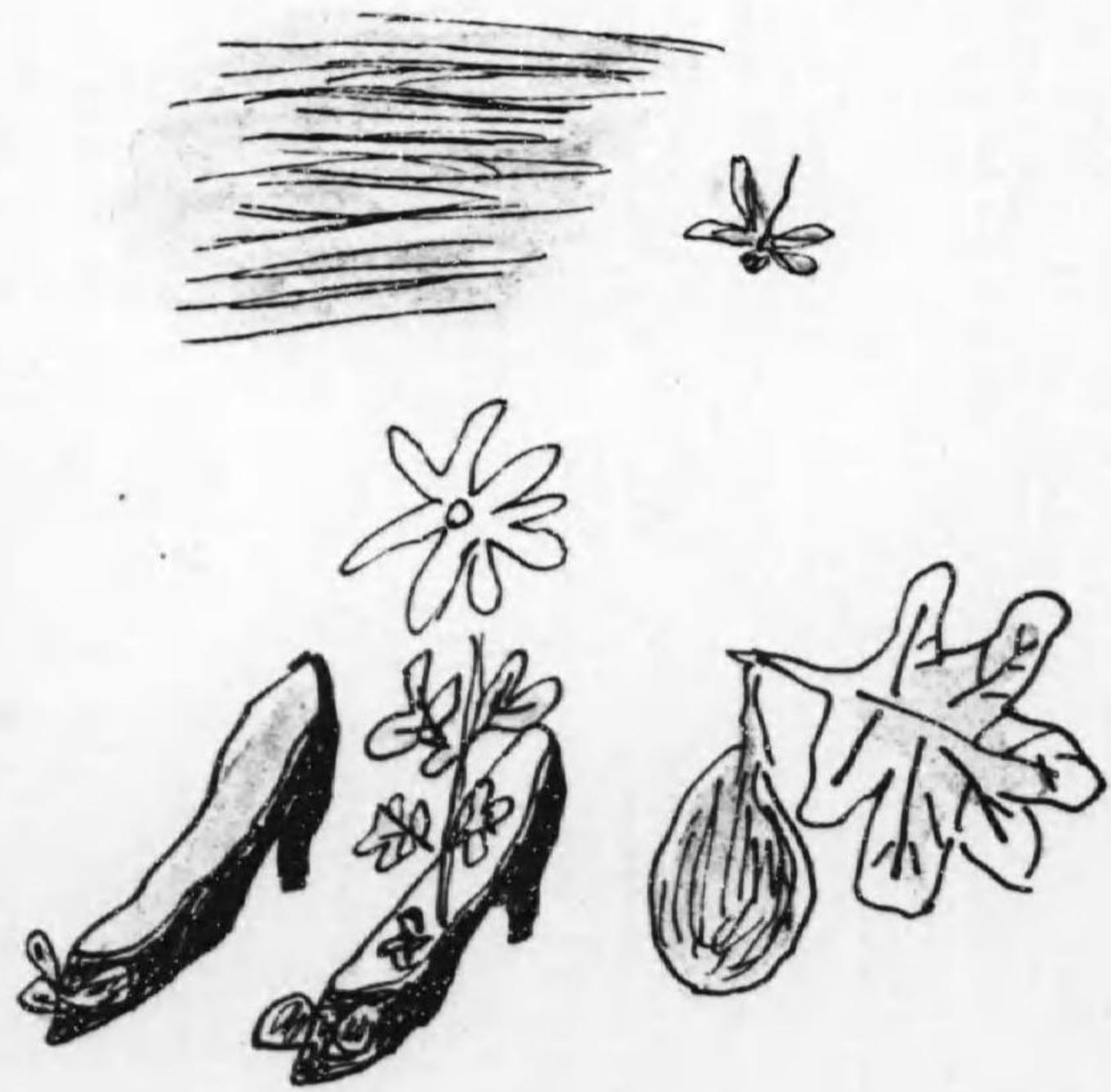


始



特218
928

新茗詩草集



序

曩に「若草・五周年記念」として出版された若草詩歌集は、異常な反響を以て迎へられた。

本書はその後、今日に至るまでの秀篇を以て、再び世に問ふ第二次・若草詩歌集である。

この十年に足りない期間には、我々は幾多の大事件を経験し來り、今又茲に、東亞再建設の爲の聖戦に、舉國一致の緊張の中に在るのである。この時代の推移は、この書にも亦窺ひ得られて、感一入深きものがあらう。

或は潑刺たる青春を謳歌し、或は時代の苦悶をうたつた、この書の作者の中には、既に鬼籍に入り、また今事變に雄々しく出征された幾多の友のあるを聞く。

さはれ、

本書を心の糧として、讀者諸子の多幸ならんことを――

二五九八年盛夏

編者

新若草詩歌集

目次

歌	篇	………	一
詩	篇	………	八一
俳句	篇	………	二五五
歌謠	篇	………	二八九

歌
篇

歌篇 1

毛の國を一目に見んと登りたる赤城山嶺は霧ぞ深しも

新井華都子(高崎)

風ながら夕日のこれば片荷だけ天王寺蕪わが引きにけり

山路孤鳩(天分)

遠足を樂しみて寢し弟の草鞋つくりぬ秋の夜ふけを

河漕翠嶂(三重)

勇みたつ少年團にまもられし團旗はたはた秋風に鳴る

櫻井 勇(三重)

朝の雨降りつぐらしも向山におり來し雲のひろごりにけり

山田みつ雄(京都)

けたゝましく電話のベルの鳴りしきり晝餉もなかにわれ立ちにけり

千曲哀草(信濃)

火事止みて再びて向ふ朝餉のみさしの汁のつめたかりけり

蓮見信太郎(埼玉)

夕まけて刈小田にふむ水溜とみに冷たし稻刈り急ぐ
靴の紐むすびてをれば登山宿の軒下に傘の乾く匂す
編棒の手を休めてもの思ふ日向の縁に目はつかれたり
牡丹臺西もひがしも枯原の見のはろかなる顛に立つ
魚のごとひかりにうごく金と銀舞踏靴こそしづかなりけれ
河床は水湧くらしも盛りあがる砂の動きの陽に透きて見ゆ
自分のこの小き憤懣が全國民の憤懣となるを信じて歩む
砂利船の砂利かきこぼす音きこゆ小春日和のぬくき河原に
張りし乳野良着とほしてしたゝれど吞ます兒なしとなげく妹はも
人まつとわが立ちてをる橋下を流るる水のしらじらとして

中谷 善 (大阪)
伍宇田津無 (不明)
長岡みどり (香川)
岩坪貴美 (朝鮮)
八木下芳春 (東京)
佐伯秀四郎 (埼玉)
川瀬幸夫 (東京)
加藤常雄 (新潟)
伊藤涙星 (秋田)
赤木 壽 (岡山)

病みこやる母にさゝぐと八つ手葉の雪を茶碗にわがすくひをり
何となしに心なごみて初詣におみくじひけば吉をあてたり
新しき春を迎ふとわが妻は貧しきうちに花を買ひ來ぬ
香椎湯潮満ち來れば啼きぬれて浦つたひゆく濱千鳥かも
新緑の輝きにほふ坂の上に心ほがらに汗拭きにけり
葉のおちて枳殻垣根透きにけり道の上におく影のこまかさ
恕しがたき人をゆるしておのづからくゆる心のさびしさに泣く
三疊打ところゆくまで飛びにけりランナーの跡は土煙しつ
うぶすなの高槻に啼く鼻をおそれたべ子はいそぎ來ぬ
鋭き心遂にほぐれずかなしきは夕日にあかくきらひたる河

歌川小夜子 (天分)
野口秋男 (東京)
柳田白雨 (足利)
立花兼子 (福岡)
山口忠敏 (北海道)
城 世 詩 (鹿児島)
津村杏子 (高知)
倉田久彌男 (長崎)
高野正一 (埼玉)
濱野基齊 (長崎)

蜘蛛の巣の多く張りたる笹藪に迷へる雛を夕べたづぬる

熊坂金佐久（神奈川）

春の夜の空わたり飛ぶ飛行機は赤き燈をとぼしてゆきぬ

水原俊雄（横濱）

泡立ちて水は日にけに温もりぬ逃げゆく目高の早くなりたり

中野保（下關）

さえわたりすがしく月の落ちゆくを熱病む床ゆ見つつわれをり

守時高樹（岡山）

背負ひたる柩小さくまもりゆく残の手向花大きかりけり

遠藤裕吾（北海道）

瀧なして落ちたぎちゆく山河のあぐる飛沫は若葉ぬらしつ

松下幸一（八幡市）

家に待つ母を思へば試験すみ歸る夜汽車にまどろみもせず

本田利明（山口）

朝空の晴れをよろこび窓ぎはの庇に忍つりさげにけり

小柴伊都子（横濱）

青海の中にもつゝ晝久し蜻蛉一匹流れて來たる

井上改造（久留米）

こほろぎの鳴きゐる朝の火葬場にねもごろ父の骨ひろひけり

山口武市（石狩）

蓴菜のまろき葉かけはおのがじし水底にありて晝しづかなり

布野謙爾（島根）

眠り足りてふるさとに今朝は目覺めたり家をめぐりて蟬のこゑしげし

中野龍二（東京）

星空に母の聲すると妹を露臺に呼びて啜泣きけり

井上正信（愛知）

唐黍の垂葉のひまに早雲あかく光りて夕づきにけり

西清藏（埼玉）

踏み登る焼石山に立枯るゝ樹原をこめて春蟬の聲

吉田北洋（北海道）

鮒を捕る童ら去りて河の面に水すまし一つ輪に泳ぎをり

加藤重雄（東京）

むらぎもの心はりつめ電燈に突きあたり飛ぶ蛾に向ひをり

守時高樹（岡山）

蕃人が山焼くらむか夜ふけて遠き火明り見ればさびしき

能瀬しげる（北海道）

病床に節句迎ふると枕への嗽ひの瓶に菖蒲挿したり

佐藤草笛（長崎）

絶間なく吹寄する風に青草の起き伏し早し日に光りつゝ

岩崎草波（北海道）

銀杏の青きをさなき實の一つ窓ゆ落ち入る嵐吹く日に

わが父の主張容れられず退職になるときまりて心落しぬ

たよる人なき我身はも嫁ぎゆく友のうはさに心をどらす

焼跡の噴井の水のこぼこぼと光眼に泌む夏の朝かな

國の秀^ほに立ちてながむる雲海のはたてを染めて日は沈むなり

夕さればこゝろさびしも何の灯か明日は渡らむ海に動きぬ

この夕べ風呂浴みをれば裸灯にせまりて動く高原の霧^{たかはら}

水平線の入道雲の彼方より光りて潮はあふれ来るかも

秋の夜の眞砂なす星うまし星二階の窓に晴れて光れり

夾竹桃咲きかぶされる石垣の放つま晝のほてり暑しも

小田初江（福岡）

竹内 一（滋賀）

山脇君代（愛知）

牧丘羊二（新潟）

渡邊浮美竹（埼玉）

岡部禮治（和歌山）

中山久夫（福岡）

山口北瓔（南洋）

小柴伊都子（横濱）

松本市造（大阪）

秋祭のざわめき避けて足早に過ぐる柩車を見おくりにけり

向日葵の花おもおもと垂れをりて庭を流るる霧の匂す

いさかひて野良に出ぬ日を厨べにひねもすきこゆこほろぎの聲

月見すと窓にかざりし芒の穂取る時なくてほゝけそめたり

石塚にひととせゆれて居り秋の山田のま晝しづけき

多摩川の秋日にうかぶ遊山船見てすぎにけり電車の窓に

おとなしく玩具買ふことあきらめし子の手を引きて歸り來にけり

亡き父の名宛なりけり送りきし秋蒔種子の目録見れば

夕餉して灯のつりどころかへにけり時雨ふる夜をわびしみにつゝ

秋ふかき隔離病舎に父訪ふと三葉きはめる畑よぎりたり

葉月かず子（東京）

佐藤和雄（名古屋）

町田美緒子（埼玉）

山田くに子（千葉）

三宅美美子（朝鮮）

吉田天史（福島）

高橋きつ子（大分）

小牟田豊夫（宮崎）

磯崎幸代（横須賀）

安齊欣子（東京）

外の面行く人をしみれば着ぶくれて銀杏落葉を踏みてゆきける
米の値の安き話に又なりて今宵の夕餉さびしかりけり
堅く冷きギブスになれずさ夜更をめざめてをるはわが一人ならむ
小作米拂ひし後を冬ごもる米残し得て心安かり
土藏の壁未だわからぬ土の香のしみにほふ庭に漬菜を洗ふ
黒谷の紅葉に照らふ日の光の夕近ければすみて寂けし
出札の手の空く時に讀まむとせし本いたづらに閉ぢて久しも
繭の値の安きをかこちわが兄は有利な養豚せむと言ふなり
青山をわが越え來れば朴の葉のあやに明るし幼な朴の葉
今日よりぞ我働かむ工場の大き煙突うち仰ぎたり

田村眞沙美(埼玉)
片岸芳水(富山)
横山壽夫(駿河)
大庭新之介(福島)
網倉きくゑ(甲府)
林はる(京都)
山路やよひ(東京)
千曲修(東京)
前田砂水(東京)
福田白萩(静岡)

かたづけて繭の残香こもり居るこの夜の室の灯の明るけれ
いたみはげしき齒を冷しつついで行きし夫の怒の原因をおもふ
向の洋品部に人たかり居れどこの店に足留むる客なし
睡運を今年植ゑずと思ひたり今まだ寒き冬の半に
燃え落ちし僚機の上を旋回する飛行機見つゝ涙流れぬ
坂の上は夕映え長し咲き列めておほに明るきさくら花見ゆ
埋立地家まだ建たず軟かき土踏みゆけば土筆伸びたり
農民の苦しみ思へば今のこの官吏減俸は適切ならむ
ゴム靴を並び換へつゝ梅雨とならば少しは賣れむと兄に語り
岩はしり透きて流るゝ溪川の水くちつけてがぶがぶとのむ

高橋マチ子(埼玉)
島村壽子(東京)
齋藤静夫(沼津)
西村まささを(朝鮮)
松永美津久(静岡)
澤内定子(埼玉)
荒川霞子(東京)
大塚喜十(群馬)
齋藤静夫(沼津)
田尻豊(長崎)

氷倉庫の暗きを出づれば目の前の眞晝日の道の水撒き過ぐる
汚れたる袖を氣にして待ちてあり治療注射を人々と共に
油煙巻く工場の中にあやしくも火群ほむらの中の人ひとは黒しも
店仕舞投賣とあはれ見せかけて物賣る術も事ふりにけり
巨大なる砂利採取機のきしむ音川面罩めて岸に響かふ
火葬料免除願の多きをばこぼす課長に怒りを感じず
ひき合はぬ蔬菜作れど時にふとわが生業の楽しさを思ふ
くたびれて餅食み居れば泥足の白く乾きて蟻はひ上る
板塀に張りてある長者番附に労働者あまた見とれ居にけり
用水池築かむと言へるこの村も長雨となり話絶えたり

鈴木悦郎（東京）
川口いさを（東京）
清島義人（大阪）
凡河内乙魚（久留米）
山崎子之一（福島）
齋藤静夫（静岡）
橋本吉夫（岐阜）
渡邊田多佳（山形）
矢作透川（東京）
藤竹架都美（廣島）

弟の釣りて歸りし川えびを小さき鍋に入れて茹でにき
風向きのすこし變りて吾が坐せる縁ぬらす雨となりて來にけれ
潮退きし渚をあさる鴉等の中の一羽が物衝へ翔ぶ
前進また前進倒れつゝ突進する戦争映畫見て涙流れぬ
匂籠る公設市場のひとつと狭きいけすに魚はあぎとふ
雑草の上に流れ出でたるアスファルト並べる罐は鈍く光れり
み佛にそなへしひまはり盛りすぎて花粉ちらせり壘の上に
無造作に失業手帖に書かれある吾が名前見つついらいとす
我家の貧しき思へば拾七にて世に出し事も寂しく諦む
まづしさに耐へ得る妻を娶らむとこの頃われはおもふことあり

渡邊綾子（盛岡）
村上安子（熊本）
鶴田慶一（長崎）
藤竹歌都美（廣島）
岩堀菊雄（横濱）
山崎溪水（福島）
鈴木新太郎（山形）
池谷静三（熊本）
鈴木泰次郎（伊豆）
北林清八（長野）

新設の郊外道の廣さには何かなじまぬものを感じぬ

やうやく病癒えしも仕事場の白きほこりを見れば寂しき

わが村に初めて張られし大衆黨のピラをあまたの人見居れり

日支交戦の號外村に入りてより新聞申込とみに殖えたり

いさかひの聲きこゆなり今日もまた兄酔うて來て無理をいふらむ

此頃は貧しさに馴れ欲しきものも買はずにすます癖つきにけり

演習の日は近づけりくるるまで稻刈り急ぐ田の面忙しき

守備隊の將校の兄の身上をおもひ憂ひて號外を買ふ

くれなゐに日はかたむきて刈り急ぐ稻田の水は冷たくなれり

約束をやぶられし我が父上は約束事は守れとさとせり

岡部 正人 (岡山)

内 田 博 (大車田)

飯塚 利市 (栃木)

掃部 千歌 (兵庫)

下川 草重 (福岡)

空閑 敬之 (福岡)

野村 よし子 (福島)

林 里 留 (東京)

群司 新一 (千葉)

崎 村 與 (撫順)

一生に一度は東京見たしとの母のねがひをいつかかなへむ

齒のいたみ耐へて帳場にすわりをる母いとほしも店の賣り出し

さかしらに語りつづくる人ありて村の集會はさびしかりけり

貧しければ世話してくる縁談もよきにすぐれば遠慮しぬ父は

近々に朝鮮にたつわが友はいくさの新聞をよく讀みにけり

たち働く我を指さして父の友は君の子供かと尋ねてゐたり

老らくの父はいたまし年の暮借金とりにせめられにけり

底びえの夜のふけゆけど明日納むる年貢の俵を父としめをり

着ふるしの我の着物を一言の不平もいはで着る弟よ

ひそくと話のきこゆ次の間に何のうはさか父母なれば

堺 一 聲 (東京)

林 里 留 (東京)

渡延山 查子 (埼玉)

大和 勇三 (東山)

山口 香雨 (千葉)

西川 昌雄 (和歌山)

樋口 長太郎 (群馬)

平山 一二 (兵庫)

吉田 兼次 (埼玉)

瀬川 淳之助 (名古屋)

つつがなく兄は除隊し同隊へわが入營日ま近となれり
残り来て靴ぬぎをれば小降りなりし雨のはげしく降りて來にけり
ひとり居の留守居さびしとかた假名を習ひはじめし母をおもふも
貧しきを知りてか幼なき弟の小遣錢をせがまぬあはれ
小學を出る弟を中學にやらんと云へば父は叱りき
少々は安くとも早く賣りつくし病の母を慰めんと思ふ
久々に故郷に歸れば裏庭の泉水いつかなくなりけり
初孫のためにと父が買ひて來しこの産衣も借金ならん
井戸端の漆喰白く乾ききり冬に入りぬと思ふ朝かも
雪あるる今日の寒けさ生きながら籠のうちにありて凍れる鮑

堺 一聲 (東京)
多田 忠 (東京)
筑間 龍男 (熊谷)
岡田 林太郎 (東京)
松本市 造 (大阪)
河原 芳之助 (兵庫)
田村 志津夫 (高田)
迫口 憲三 (廣島)
田口 游 (朝鮮)
松尾 たか子 (長崎)

田の中に小さき川の流れあり鱸ほりに來る冬とはなりぬ
いつはりのことばをつかふ此頃の慣れし仕事を悲しく思ふ
酒のめばしれごとのらす父はかなしさからはすしてしたがふ母も
理由もなく叱りし妻とさし向ふ夕餉の膳はわびしかりけり
一人子に妻をめとりて老いらくの母はいささかさびしかるらむ
子供みな思ふとほりにならざりきと此頃父のやさしくなりぬ
九時すぎてとなりの部屋はしづもりぬ蛙鳴く夜を母と語れり
この夕心ゆふこいらだたし宗教をそしりて祖母といさかひにけり
兄病めば晝の仕事につかれけり日記をつけていぬるわれかな
兩方に分れて大樹荷ひゆく人夫の拍子そろひけるかな

堀 美江子 (愛媛)
大前 登與三 (神戸)
渚 とし美 (朝鮮)
中島 雄紅 (兵庫)
水島 朔朗 (熊本)
南 百合 (島根)
貴 世子 (静岡)
浅利 伸一 (熊本)
下重 甚七 (福島)
土屋 好一 (東京)

百姓に慣れし娘を娶らむと母ひたすらの思ひならしも
はじめての背廣を着れば祖母は門邊まで出て見おくり給ふ
雨降ればものあきなひもなかりけり父は寂しくひさしつくろふ
今年より父とともども苗代に種をおろせり心嬉しも
暮れ残る池の向うの街道をいそぎて人の行き過ぎにけり
働かずに親の金をばつかひあるさびしさ思ふ身となりけり
若竹の色はすすしも朝風にひと葉ひと葉のみなそよぎて
何もかもあきらめるとのたまへる母のなりはひ思へばあはれ
叱られて出でて來し子は泣きながら柿の落花つなぎそめたり
ふるさとの母が手揉みの茶を入れて若葉ながむる朝となりけり

大塚喜十(群馬)
浅利伸一(熊本)
寺川義男(熊本)
布目寛(福井)
西峯常美(高知)
大和勇三(東京)
高林貴世子(静岡)
早川兎月(東京)
佐藤壽(熊本)
四方清美(京都)

母のみをさきに歸して夕明り時の間借しみ小麦刈り急ぐ
年毎の保険の金を母上は掛けなやみつ掛けて來にけり
百姓をせぬ友あはれ生えそめし小豆を靴に踏みつけ居るも
すこしばかり生活のむきのよくなるをそねみて人はそしるなるべし
直だちの竹の向うに青空のひろびろ見えて梅雨あがるらし
朝靄の向うの山はうすぼけて鴉飛び行けり靄のあなたに
失業してこの頃父の我や母に氣がねをせるがさびしかりけり
ゆとりなきくらしを知りて祖母はお寺詣もやめられにけり
此の頃は野良に出づればどの人も困る生活の話ばかりしぬ
梅雨晴れて桑取るわれの急はしければ今朝は風呂水妻に汲ましむ

和田相鳴樓(神奈川)
大塚喜十(群馬)
清水保雄(群馬)
橋本直(大分)
北見悦雄(熊本)
橋本吐詩夫(岐阜)
丘本冬哉(神戸)
廣田慎一(大牟田)
和田義見(神奈川)
藤田章二(埼玉)

繭賣れど手間にもならず桑畑をつぶす家多しわがこの村も
 同僚に惜しまれつつも近眼の弟は誤配に局を辭めにき
 病む母の寢息うかがひ部屋隅に電燈をよせて履歷書を書く
 小田つづき稻架のかげゆ演習の兵現はれて銃うちはなつ
 夕土間に濡れ着ぬぎつゝ久々の夕立雨を母とよろこぶ
 亡き母の遺品の着物縫ひ直し羽織となして父は着給ふ
 求職に町へ出でたる友あはれしたゝか酒に酔ひて歸れり
 新しきこと好む女には珍らしく孝心深しと父は語れり
 ありのまゝにわが境遇を話しつゝ縁談を持ち來し人とをり
 この頃の生活くらし難きにかわが家にいさかひ事の多くなりたり

保永相思 (埼玉)
 城田まさる (福井)
 玉井 秀 (和歌山)
 松尾たか子 (長崎)
 大塚喜十 (群馬)
 村山晨花 (石川)
 田代白愁 (静岡)
 中西多津美 (和歌山)
 永田露子 (東京)
 中島マサシ (愛知)

裏山の百合手折り來し子供等のはきものは皆露にぬれぬ
 わが家をかかも貧しくせし父をとがめがたくもおもはれて來し
 老いてゆくいのはさびし父親の義齒をはづして磨ける見れば
 此日頃慰問袋をつくらんと吾子は小遣貯めて居りけり
 秋の雨晴れてすがしも張り替へし障子の糊の乾くにほひす
 貼りかへし障子明るしこもりゐて庭の落葉のおとをきゝつゝ
 甘酒の熱き茶碗に手を觸れてしみじみ阿蘇の冬をあぢはふ
 雪の夜の舞臺稽古はかなしかり雪國遠き母を思ひて
 うつろなるいきほひ張りて寂しさを寂しと云はぬ吾はさびしも
 しのびかに垣越え來るは妹ならしわが胸ただにたぎち鳴るかも

飯沼せん (茨城)
 松澤のぶ子 (埼玉)
 岩井幹夫 (福井)
 久永正穂 (東京)
 瀧口白羊 (東京)
 米山星峰 (横須賀)
 高木九一郎 (熊本)
 青山映一 (東京)
 古賀敏子 (福岡)
 大畠静男 (千葉)

見はるかす海のあなたのかの島の郵便局員に赴くわれは
吹く風に足場の板は揺るれども必死にわれはペンキを塗るも
見はるかす日向國原霧島の山ほがらかに吾がのぼり居り
秋の夜の龍王山にちろちろと燃ゆる火のあり山焼くらむか
冬ざれの八丁松原わがゆけば蓑蟲取りがただ一人ゐる
大空を飛びゆく雲を眺むれば心何時しか雲に従ふ
歌の會次ぎはわが家ぞ野澤菜を漬けて待たなむ熱き茶を煮む
父もかくありき子ゆゑかわれも亦かたくなの性持ちて悲しき
もの云はすさあらぬ方を眺めゐる君をかなしむいさかひの後
待ちわびし人の足音のかそけさは月の光を踏みて來るらし

白石隆一（島根）
玉木正治（高田）
三木耕紗子（熊本）
藤竹歌津美（廣島）
高橋利枝（高知）
双葉賢治（佐賀）
小林朝（信濃）
小谷里志（京都）
奥飛彈鮎子（東京）
田中霧都灯（北海道）

落葉して明るき山路朝な朝な口笛吹いて炭焼きにゆく
中學を終へてこの先いかにせむ思ひただすむ春淺き丘
ほろ苦きすかんぼの莖を噛みながら泣きたき心じつと堪へ居り
戀知りてやくざとなりし性かなし時雨聴き居り圖書館の窓に
馬櫓の鈴の音はたと止みにけりこの湯の宿に客着けるらし
吳須に染む指いとほしく押しなめて日にあたるかも陶工われは
山ふかく母と呼ばへば山彦も寂しくもあるか母とかへすも
春いまだ遠き信濃に歸りゆく友を送りて停車場に來し
臥りゐて松かぜさびしいにしへの猶太の民のことと思へり
去年逝きし子の指がたの今もなほ障子に残りわが家寂しも

失名氏（不明）
淺山徹（福澤）
蒼海羊子（東京）
青芝満二（名古屋）
中澤華人（新潟）
中島魚史（愛知）
荻原水郷子（山口）
溝口文武（東京）
絲瀬俊文男（岡山）
薄井良太郎（神戸）

いつもいつもここを通りて學校に通ひしものよさいかほ皂莢樹もある
白ふどし津輕男子はとらへたる蟹わけ合ひて食ひにけるかも
春さむくそむきし人の思はれてちらちら見ゆる野火もかなしも
たそがれの青き玻璃戸の冷えびえと蚯蚓はすでに鳴きそめにけり
あわたゞしく來りて去りし人のあり夕ぐれ近き春のわが部屋
靜かなる春の海見ゆふるさとの母の御墓のたんぼぼの花
阿武隈の廣き河原にひとすぢの足あと寂し今日も暮れゆく
貧しければ思へる人もつれなしと日記に書ける妹はかなしも
雲雀鳴く空の重さを閉ぢし目の瞼に堪へて春をわびしむ
夜をこめて撮影したるゆふべよりかりそめの風邪を引きにけるかも

片寄十年(福島)
土保幹衛(大阪)
副島すま子(東京)
橋本重雄(兵庫)
阿部房子(東京)
木村友彦(金澤)
青葉城路(宮城)
島洋子(東京)
杜京二郎(静岡)
後藤久枝(京都)

寝ぐるしき夜床に遠く雷のとどろきを聴きぬ春きたるらし
龍王の麓にありて頬白のさへづる夏となりにけるかも
山里の姉の家より送り來し早蕨を煮てわれらいたたく
闇を飛ぶ螢をじつと見つめつつこの寂しさに酔ひ居りわれは
貧しさに耐えがたしと云ふ友のこの頃酒に親しむあはれ
いさかひに負けし弟の黙々と菜莢てんぷらを食べる庭の晝かも
雨やみし背戸に出づれば宵闇に茗荷畑の匂ひしるしも
人のこころわれにかへらず山蕎麥の花咲く頃となりけるかも
しづかなる夕なりけり朝顔をしみじみ見れば實を持ちてあり
零落の友と語ればさびしくもまた満洲へゆくといふなり

國枝健一(岐阜)
藤竹晴夫(廣島)
桐生好(神奈川)
岡田紫泉(岐阜)
青山貞三(福島)
原マコト(東京)
久保田曉藏(東京)
尾崎直子(横濱)
佐藤蓼波(新潟)
冬間もる(廣島)

胸を病みて工場を退きし友のありわが身のごとくこころ傷む日

山深くわけ入りて來しさびしきよ櫛の木もとに墓ひとつある

はかなかりし縁さびしみひたむきにミシンを踏める姉のいたまし

はれやかに君振舞へばねびしくも人避けてゐるところ沈みて

指切れば土の匂ひのいたいたしく傷に觸りて秋立ちにけり

茶の花のうすらに匂ふ樹蔭にて言葉すくなく別れけるかも

嘆きつつ今宵も見つる天の川人もひそかにひとり居るらし

たらちねの親をうしなひ横濱の港にわれは働きて居り

ふと何か思ひ出されぬ日向にて楽しく友と遊びぬし頃

死に隣るかなしき別れする時も涙耐へよと云ひし兄はも

千城 伸 (熊本)

椎野 大平 (神奈川)

藤原加須恵 (岡山)

花緒香俊郎 (秋田)

同 人 (同)

三條 達 (不明)

同 人 (同)

岸川晴生 (不明)

同 人 (同)

小澤鶴子 (千葉)

昆布茶喫めば遙かに遠き北海の荒潮の香の匂ひ來るかな

筑紫路の秋はかなしも紅の櫺吹く風に君を送れば

萬葉の相聞の歌讀みてゐるこの夜くだちを時雨降る音

はるばると天わたりゆく月を見つつ蒙古の旅の友を思へり

秋さればさわぐ雲にもあらなくに夕空遠く人を戀はしむ

秋ふかき深山龍膽藪かげに咲きひそみつつやがて枯るるや

かつぎ來し稻をおろせば夕土間にはたと鳴きやむこほろぎの聲

病む母のうるさからむと思ひつゝ鳩啼時計のおもりはづせり

甲田嶺は雪降りて居らむこの宵の寒さに早く母のいねます

雨戸打つ野分の風にふりむける爐の火に赤き父の顔かな

浦邊禮介 (米國)

小石葉月 (福)

失 名 氏 (不明)

富田帆丘 (千葉)

杉山 一郎 (高知)

種 村 悦 (新潟)

太 田 準 (石川)

加藤貞子 (東京)

赤平武雄 (青森)

渡邊誠之助 (東京)

雲低く垂れて寒けき海の面に群れてくづれて鶉の鳥は鳴かず
歸り來て夕餉に間ありしばらくを畑の茄子に水やりにけり
橋の上見おろす川の水黒し雪降る中を筏くだり來
釣道具の手入れをせむと老父は電燈を低くつりかへにけり
傷口もやゝ癒えければつれづれに俯向きしまま筆とりて見る
夜業終へてわが掃く土間の冷えふかみ埃に噎せて咳き入りにけり
空しくもはかなく崩えし夢の塔をほゝゑみ眺むる女となりし
木枯の裏街を小路へ曲れた そこは悲劇を悲劇と知らない所
病める人の答いらいの無きによく見れば涙ながしてゐたりけるかも
子のために鈴を求めて歸る道振りては獨り微笑みにけり

矢澤幸夫（松本）
失名氏（不明）
藤井溪花（神戸）
篠原不二樹（千葉）
香根守 リッコ（岡山）
種村 悦（新潟）
青木 ちえの（東京）
有馬菟茂詩（鹿児島）
澤田英俊（徳島）
河口宏美（山口）

埋立の町のうしろに春あさき夜寒の海がほのじろく見ゆ
夕近む廣場に遊ぶ子等の中に泣く子が出來て皆歸りたり
はてしなき青空見つゝ高原に明るくわれ等飯をはみゐる
賣る程の米も無ければこの頃の米の廉さを氣にせざるなり
二日三日つゞく寒さに今朝ははや井戸のポンプも凍りつきたり
たはやすく職つとめは得ると思ふらしき父の手紙は吾を責めて來ぬ
妻となる人の身丈を思ひつつ田植蓑編む雪にこもりて
野茨の花のさかりの畔を來る代掻き馬は泥まみれなり
紙鐵砲に熱を忘れて遊ぶ兒の一しほに咳くこゑをきゝぬし
物言ふもの憂くなりぬ夕まけて慣れぬ土工に身は疲れたり

村上政一（松山）
平山久雄（東京）
村山秋彦（松山）
藤山宵二（福島）
加藤賚作（大分）
佐藤經雄（山形）
眞澤 諦（長野）
渡邊浮美竹（埼玉）
佐野そてつ（神戸）
樋口長太郎（群馬）

ふる里に歸りつきたる思ひふかし草屋根あつく葺きし家々
日並べて降る雨ぬくし里芋の白芽はつはつ伸び揃ひたり
勤め退きて幾年か経し父のみの畠作りも馴れてきませり
ストーヴのとり除かれて廣々と事務所明るく仕事はこびぬ
毛氈掃きて母はせはしくなりにけり病にたへて吾は生くべし
埋め所探しあぐねし球根のあきらめし頃芽ぶきたるかも
鋏の柄のにぎりくぼみのしたしけれ祖父も父もこゝを握りし
都市のもつ夜空の明りうつろへる車窓に目覺め見直しにけり
賣られ行く馬に秣を興へつゝ父は小作農の苦しさをかたる
こゝの橋渡る人々ことごとく鋏をかつぎゐてのどかなるかも

岡 長 榮 (大阪)
藤崎たみる (千葉)
大江 久子 (京都)
松 南 輝 (朝鮮)
熊倉 双葉 (東京)
櫻林 敏治 (山梨)
尾場 曉美 (秋田)
平山 郁夫 (高知)
環真 砂緒子 (東京)
根岸 千江 (埼玉)

非番日の眼さむれば枕邊に夕陽はうすく流れてありけり
風出でて夕べ晴れたりはろかなる淺間の烟あざやかに見ゆ
汐煙あげてとゞろく落潮の渦巻き渦巻き鳴門の峽に
廓跡の大き石塔に簡易保険の臨時拂出しの紙貼られたり
洗ひ粉の匂ひのこれるくる髪をすきつつあれば流星の消ゆ
ところどころ山を拓きて麥つくり家居ともしく人住みつけり
失業して幾日過ぎしか土間隅のツルハシ赤く錆を吹きたり
わが軒にすくふ燕の二番子も親となりつつ土用來にけり
足とめて草食む牛を叱りつゝ夕づく野良を歸り來にけり
水まけの指はいためどたへにたへ我は日照りの稻田ませをり

金澤長三郎 (青森)
麻生基司 (埼玉)
鮫島玲二 (大阪)
牟津城子 (函館)
福田あい子 (埼玉)
砂子彦三 (岩手)
宮本利彦 (群馬)
谷 旗 郎 (高知)
山 峽 弘 生 (秋田)
園 邊 國 子 (熊本)

雨はれて摩耶六甲の山火事のあとくろぐると目にせまり見ゆ

放牧の牛の姿の見えそめて山皆青し霧晴れにつゝ

病みてよりのぞみは遠く隔たりぬされど捨て得ぬ悲しさにあり

初蚊帳のほのかにこもるかびの香に去年の夏をし語りあひけり

繩とびの繩高ければ愛らしき袂着の子はとばすなりたり

つやつやにトマトは赤く熟れてけり友も好みしトマトなるかな

マストに懸りつ離れつ揺るゝ月を仰ぎて獨り甲板に寝る

田を鋤くに歩まぬ馬を叱りつづけ日暮となれば聲かれにけり

かんぼちやの花さゝやかに揺るゝ見ゆ蜂入りゆきてしまらくを經し

父上の怒はげしく他人様とあらそひゐるはわが事なりし

岡 長 榮 (大阪)

深見トシ子 (熊本)

熊谷双葉 (東京)

藤 なみ子 (横濱)

松 平 脩 (東京)

米山千賀 (大阪)

秋野美江 (静岡)

前田秀志 (福井)

庄司哲仙 (山形)

柳原陸之介 (秋田)

繭の値の安きを言はずひたむきに桑きる母は老いたまひけり

いくらにもならぬ蕙と知りつつも編まねばならぬ百姓われは

秋に入りて兄が釣り來し川鮎はたくましくして卵持てるも

楽しみのなき父上は年老いて煙草のむことを覺えたまひぬ

寄宿舍の洗面所もいつか秋ふけて朝風さむく髪のちらばふ

小さな顔をならべて待てる子供等に赤き西瓜を母は切りをり

あかぎれの指いとほしやあたたためてこのあしたむく蠟のつめたさ

大きな欠び一つしたルンペンのまともベンチに横たはりたり

衰へし父を想へばけふの日のこの我がつとめ尊とかりける

山の湯の脊のしづけさ蚊帳のうへを匍ひるしすいちよ鳴きいでにけり

烏 髪 四 平 (京都)

神 作 凡 兒 (大牟田)

サ チ 子 (静岡)

横 山 壽 夫 (静岡)

遠 藤 美 代 子 (岐阜)

西 田 勘 三 (滋賀)

園 部 國 子 (熊本)

田 邊 義 明 (東京)

尾 場 曉 美 (秋田)

前 田 秀 志 (福井)

暴風に荒れはてにける稻田見つつ來るべき爭議胸にゑがけり

釣橋の上よりのぞく青淵に冬づく光ふかく射したり

青き蜜柑獨り剝く夜はふるさとのうしほの匂ひ眼に泌みるなり

秋くれば菊を咲かせてたのしめるふるさとの祖父の心知る日や

薄藍に澄みてはるけき湖向ひの遠嶺のうへの夕茜雲

寄合ひの席に坐りても言はぬ我が階級は貧しかりけり

夜鴨打つ人に煙草の火を借りて息ふきい行く夜の山みち

冬食ふに足らぬ不作で峯々の白きを見れば慄きおぼゆ

朝明くる生駒の雲や乳牛の乳房のぬくみしたしくなりぬ

ときのまの眺と思へど潮波裂けてちるまも見きはめんとす

鹽澤健二(山梨)

五十嵐順作(札幌)

川崎清(東京)

山田清史(新潟)

山田一誠(長野)

養田寅彦(熊本)

久保久(大阪)

花緒加俊郎(秋田)

山あき(大阪)

竹内美果(東京)

夜食べる林檎の酸の身に泌みて何の涙ぞふとながれいづ

樹の幹にからみしつたのひとすちはひと葉あまさず鋭き紅葉せり

河岸に出て魚干す人ら冬の日の水照り浴みつつ餘念はあらず

いささかのことに張合ふ弟妹をまがなしみつつ書を伏せて見つ

貧しかるわが家なれども竈の火どんどと燃えて朝の明るさ

掌のすぢをくろくきざめるあぶら垢荒き仕事に我も慣れたり

海のうへに天草島も晴れて見ゆ働らくことの何ぞたのしき

送電線に青空高く晴れて居り山を越えゆく秋の旅かな

溪川の氷もとくる初東風に鳴きつゝ鴨の岩づたひする

幾年の月日をかけて悩みこし想ひ一つにけふもこだはる

若杉伸子(大阪)

藤田治三郎(滋賀)

坂本紀秋(大阪)

久我正一(千葉)

岩井清水(岡山)

鶴飼副馬(和歌山)

古川嘉文(熊本)

葛籠花一(徳島)

中村夜詩人(熊本)

工藤芳子(東京)

醸造所の壁の高きにふきあつるみんなみ嵐雨氣をふくめり
雲さけて朝日てらせば菜畠のみどりの色のとみに冴えたる
校庭に散りたまりたる櫻花うつくしければやはらかに踏む
遠空に黄雲の光りただよひをり林のなかのむらぎえの雪
山こえて春の歩みのちかづくかとどろとどろと南風吹く
四方の山根雪のかすむ春にして世の父としもわれはなりける
もえ残る野火またぎつゝかへりゆく夕はかなし深山田の畦
夕焼けて潮さし來たる川口に渡船をとむる旗あげにけり
雪路を歸りて來れば暖き灯の親しさの身にしみて來ぬ
諍の原因に思ひの觸れしよりせつなくなりて口をつぐみぬ

濱田一人(東京)
久松靜園(高知)
水島みどり(徳島)
茨木末吉(茨城)
谷夜潮(新潟)
鳥羽明義(長野)
安田邦夫(京都)
高橋砂渡子(福島)
仲野寥子(大分)
東良一(東京)

この朝を藁と芥と流れ來る潮を見れば何かしたしき
小さな驛に人降り人乗りて梅咲く日の野のしづかなる
おみくじをたたむ暇も梅花散りてひそけし山の宮居に
すみてきよき瞳のおくにさとはしる光りはかなし冷やかにして
螢火を吹き流しゆく初夏の風あまみもつ青草の畦
ものいはし籠にむかふ母の背を哀しく思ふ逆らひしあと
病み給ふ母にまゐらす早春の獨活の汗物うれひあるかな
盛んなりし家の名残のあとみせて八重縞つばき今年も咲きぬ
町に出て夕飯食ひぬかへるさは麥の穂立のにほふおぼろ夜
麥秋の村を貫きて幾度か軍用列車とゞろきゆきぬ

田中博(宇部)
朝野二郎(東京)
内野まさる(大牟田)
細田盛久(東京)
立花蘇土(不明)
小川白兔(千葉)
酒井彬子(千葉)
宮部れい子(山口)
小松貞示(静岡)
坂本紀秋(大阪)

紺青の果てなき空に雲一つある日はわれに寂しさのなし
 田仕事を終へし乙女等ほがらかに口笛吹けり夕陽の畦に
 夜の色に煙草の煙の染みてゆく山科の夜を一人歩みぬ
 節穴を洩るるあさ日の一寸ちも手に受けとめてしたしさ覺ゆ
 峠下りて水は花崗の谷にそふ讃岐の道となりてをりたり
 悲しきは足袋の白さよ佳き人の物おもひ日々におとろへゆく
 枕邊の朝の玻璃戸にさわる葉は柳なるらし夏となりけり
 若き日の希望も日々のはひにかゝりすぐせばむなしとおもふ
 目をさまし啼ける燕にまだ早起朝の雨戸をあけてやるかも
 落日の赭く大いなるかなしみを馬は無心に草食みてをり

南海 静子 (長崎)
 赤塚 賢二 (新潟)
 山澤 耀司 (京都)
 丸 操 (東京)
 久保 太郎 (徳島)
 宮川 美佐 (東京)
 丸 ミサヲ (東京)
 河本 勇 (東京)
 平松 清史 (新潟)
 城 夏子 (佐賀)

乳搾る平群女と我とみて黄燐ヶ嶽の風に吹かるる
 下水工事の土管の黒き影ふみて月夜を猫のひそやかにゆく
 玉とめて風にそよげるくもの巢に靜かに靜かに五月雨のふる
 船腹にうちあたる波の中廣くうねりて消ゆる夕風の海
 此の原にたつべくなりし病院の敷地は廣し夏草茂る
 青草にきづかれてゆく塹壕の黒きうねりの起伏果てなし
 あくがれの山に行けざる寂しさよ山岳圖書をひとりひもとく
 女學生の慰問に来るといふ朝は病みて久しきひげ剃りにけり
 壁おちて見ゆる隣りの灯かげにも親しさおぼゆ秋となりけり
 病み臥して見廻りせぬば牛すらもさびしくやあらむ板戸蹴りつゝ

青山 季弘 (千葉)
 關 百合子 (秋田)
 堤 一路 (東京)
 城 夏子 (東京)
 檜木 良男 (東京)
 佐藤 安生 (水戸)
 嶋田 一周 (東京)
 山田 耕二 (千葉)
 鹽谷 蕉二 (熊本)
 植田 敏夫 (茨城)

挨拶は後にせよとて父上は谷の清水を汲ませたまひぬ

高橋もりゑ(京都)

あきらめかねていつかきて居り暮方の土藏の裏のうすじめりかな

山口秋子(千葉)

丘の上の學校裏の白旗はあさあさ人を野に急ぎ立つる

人見静枝(東京)

若き日は我も持ちたる不平なり友に煙草の燐を擦りにけり

平井青踏(大阪)

巖の上へをみな立ちたりおのづから華やぐごとき溪川の音

中道 豊(長崎)

早魃の水を争ふ堰口にするどき空の色うつり居る

神作凡兒(大牟田)

ねつとりと指の熱氣にまつはりてくれなぬ濡るゝ器粟のはなびら

田中一清(小樽)

陽は夕べ風の青田のさわめきにまひつゝ澄める銀やんまいくつ

草 日光(熊本)

雲はるゝ朝のみ空にとゞろきて秋季競馬の煙火あがりぬ

平松清史(新潟)

銀粉を残らず撒きて蛾よ踊れ一夜のいのち悔ひはなからん

河合歌子(大阪)

玉にほふ葡萄の房はぎやまんの青き器に盛りてめでたし

赤堀渥美(神戸)

秋となる光り静かに澄み來らし空の碧きに手も染まるべく

法原久治(廣島)

な動きそ萩よ尾花よこゝにして秋晴るゝ日のかなしきものを

碎木霞子(静岡)

秋の旅をはりとなりし湯にふりとゝのひてふさはしき雨

山守秀雄(北海道)

洗面器に髪の毛がゆれて、朝の孤獨は山の少女を戀しがらせる

秋田仙道夫(秋田)

山峽の町より町に通ふバス我が村に來て灯をともしけり

佐竹信朗(廣島)

女髪をとけば、朝風、乳房に性慾が脂ぎつてゐる

北 洋(瓜哇)

菜を漬ける厨の母と時折りに言葉交しつつ履歷書を書く

日本心一(大阪)

見よ、過去のオペラグラスに青い青い空は萎んで、悲哀の星一つが擴大する巖

土 夫(静岡)

乾きたる秋の空氣の中にしてマツチを擦れば火薬が匂ふ

綾井 讓(香川)

明るい温室——花を抱いた私の一部にかすかな知覺のしびれがくる

白石道人（福岡）

ダリーヤの莖水づける今朝の露冷々として秋晴るるなり

山下久（鹿児島）

くれがたの風ゆすぶるポプラの上に星空晴れて、遠い人への思慕が甦る

横島宏一（大阪）

血を吐きし後の寒しも空遠く暮れなんとする山脈を見る（病院）

秋浦五六七（宮崎）

わかれゆくさびしさ言はずにひたむきに手風琴鳴らす弟あはれ

浅野勝利（足利）

鶏小屋の外に追はれし鶏の卵とられて悲しかるらむ

倉澤薫（東京）

白いキャビンの丸窓に、コバルトの空ちらついて、港の三色旗が明るい

小柳一誠（北海道）

この道のアカシヤの花にまつはれる多き蜜蜂鳴き聲高し

都田徹郎（米子）

働きて歸る夕べのたのしきや満員バスの揺れも氣にならず

日本心一（大阪）

白い貝殻に島の娘等の憧憬が秘められてゐる

白 漢（福岡）

海原ゆ吹きあぐる風砂濱の船の帆柱揺すり鳴らすも

水島哲也（高知）

裸木よ、冬空にほえろ——わたしの口笛が疾風にちぎれる

矢野正義（岡山）

身も魂も冷えゆく夜なり何やらんだいなる響彼方を過ぎる

能重桑柘（東京）

冬山に、貴女は樹氷であるかも知れない、僕は山岳のグラフィックを繙く小澤 晃（東京）

よごれた冬眠の衣粧をとれば、あの薔薇園のあまりに明るい感情

井椎稔二（福岡）

吹雪あとの村通りすぐる郵便車無愛想にこそ音をたて

松樹明（函館）

階級意識を考へてゐた、深夜に、明朝さを装つて白い花など咲いてゐる

齋藤政雄（福島）

窓が一つ、四角い蒼穹は——僕の青春だ！

城山 録（広島）

廢船の舳に油ぎつた波音が暮れると、星、黒ずんだ乳房の匂ひを感じる

加藤昌樹（大阪）

望樓の高きガラスに夕映えはあかあかと残り人の影見ゆ

嵯峨郁夫（樺太）

あらはな腰に青春の花粉をつけて、ライトに泳いで、踊り子春の溜息
忙がしき街の雑音静もりて送電線に月青く冴ゆ

時に空を仰ぎ洗濯をする女、遠く一塊のあぶくがあつた

空高く風吹き晴れて星寒し黒々と立つ庭の裸木

日曜日は薔薇色のミュージック・ノートです。私は思ふまま、美しい音符を
綴らう

プラタヌの夜の巷の灯のあをさ魚族のごとく人等行き交ふ

山腹の斜線をバスが疾走ると、乏しい感覚にすり落ちさうな空を感じた

群青の空に、シュミーズが揺れ、春がゆつたりと泳ぐ

嫁ぐてふ友の噂を聞きながら紺事務服のしつけをばとる

長田眞理和 (東京)

三田 旦 (東京)

丘 美香 (東京)

吹田みちを (仙臺)

水上寒子 (栃木)

土屋蕎四郎 (埼玉)

樹群徹生 (京成)

松山清徳 (久留米)

柴田比佐子 (東京)

山の温泉の窓、遠河鹿の韻律、夜の潤ひにききほれる

架空の人生を吊り下げる廣告氣球、貴女は知つた風な言葉で私をかたづ
ける

青い海白い雲を装幀した新刊書のやうに——七月は颯爽と訪づれる

漁村にくらい灯が點り、戀に狂つた魚白河を溯る

女學生ら、今日もバスの中の小鳥となり窓々に並ぶ黒い瞳よ

これ賣りて活動みよと妹に本持たせ出す春ぞ悲しき

代搔きの田面とろりと夕陽ながれ氣負へる馬も素直になりぬ

人通りまばらの更けし十字街花賣娘がネオン見てゐる

みどりの畫布で性慾がむん／＼してゐる、五月のまひるは太陽も呆けて

鳥羽明義 (信州)

松村清太郎 (大阪)

青旗青也 (兵庫)

仲内莊一 (茨城)

衣更着 信 (香川)

足立菊雄 (福岡)

木澤龍太郎 (秋田)

兒玉千春 (高崎)

南 四路子 (新潟)

澄んだ朝空を掌に持ち、合掌の一とき、明るい思想となる

伏見 燿 (函館)

はたらきて今日の仕事に疲れたり夕潮高き磯路歸るも

竹内政二 (兵庫)

久々に歸りてみれば田作りの老いたる兄はズボンをはき居し

高 晏子 (京都)

白い洗面器、女工の抜毛、生活が吐息づく

神 陽子 (東京)

白いクローバーに聖處女のハンカチが忘れられた——純潔な日の想ひ出

です

藤 やよひ (名古屋)

眠つてゐる時だけが幸福な母……母よ、あなたの顔は荒彫りの塑像に似

てさみしい

福島秋人 (三重)

雲切れし喜びあげて人らみな観測ガラス眼より離さず(日蝕)

草 笛 明 (秋田)

初夏のアバンチュール、高い樅の先に六月の雲が一つちぎれて消える

加藤嘉男 (名古屋)

山路来て赤き木の實を子らと食み渴くのんどの癒ゆるおもひす

土方 敏 (哈爾濱)

鷗は洗濯したてのハンカチーフ、青雲をネクタイとして港の空は伊達者

です

青木一衛 (大阪)

青いセレナーデの搖曳、酔ひしれて唄ふ女の頸で青脈がふるへてゐる

關口堯生 (東京)

くる、くる、くる——俺の感覺のなかで向日葵のやうに踊つてゐる、夏!

水上フミヲ (栃木)

秋ぞらの藍いろ深し窓ぎはに机を据ゑて製圖すわれは

月見不二夫 (熊本)

拋物線に飛んだ鳥。空白なゆふぞらへ、私のところの暗翳のごとく

五井義夫 (千葉)

秋、朝刊はうす青い、封切獨逸映畫のピラを一枚疊みこんでみた

平井青踏 (大阪)

晝の化學室はうすぐらく、劇薬は赤く變化して私はねむる

企 矢 男 (不明)

登りめく山桃の木の梢高く赤きつぶら實眼にさやかなる

矢野奇一 (和歌山)

吹雪のなかの歩哨、誰か國境のない地圖を描け

富士がどつしりと雲をたべてゐる、僕は新らしい食欲を感じた

一年一年大人になるをおそれつつ霧の夜みちをたゞ一人ゆく

履歷書の墨すりてゐるわが額を秋の蚊一つきてさしにけり

日かければ背筋冷えてきて山峽の稻刈るわれの汗ひきにけり

涯なき空のカンヴァスに、私は色盲患者のやうに七月の感情を塗りつけ

るのだ

秋は天蓋のないソフト、あゝ私のパンセにピリオドがない

朝なるにおどろきさめて腹部より熱いでたらし渴きを覺ゆ

秋！ 枯れた秋の心の象形文字に、ほのかな聖燭がともる

一露寺 伸 (横濱)

谷口久司 (石川)

石川穂波 (北海道)

秋篠ナ、子 (大阪)

谷口ゆき緒 (富山)

深雪緋紗子 (山形)

谷口久司 (石川)

野終 荻花 (福岡)

城ヶ丘玲一 (香川)

鐘が鳴る村の晝、チンチロと蟲が啼いて、赭ら顔の男が大きな鎌を研いでる

今は亡き妹かなしオルガンを買ふべき錢のわれにはあるを

虹を吐きうすれて行つたさみしい秋の風船玉です

炊事場の湯氣にこもらひ話す聲秋の朝げを思ふ親しさ

祭の人にもまれつゝふとたのしかり若きをみなほこり思ひて

こぼれ出づる實をも露をもこぼさじとせはしく食へり母が賜びし柿

馬車つける栗毛雄々しくつつ立ちて鼻ふくらませ前掻きにけり

かりそめに稻刈るわざを手傳ひて背中に覺ゆ汗のうれしさ

六日めに一夜の風呂は楽しくも油臭くもさびしくもある

原 一二也 (千葉)

井尾瀬梧郎 (東京)

花緒加俊郎 (秋田)

小見山和夫 (香川)

宮本彬子 (釜山)

石井 寛 (神奈川県)

假屋 信夫 (熊本)

中島 美世 (埼玉)

下町 悟 (名古屋)

湯に入りてすぐにいねたく思へどもあはれなるかなわれは嫁なり
自轉車に、片足かけて、友が出るを、長らく待ちぬ紹介所の前
たちのきをせまられつゝも猶居れば子らの遊びも寂しげに見ゆ
老い見えて言葉少き父上にまづなみくくと屠蘇くみまゐらす
宋哲元より得しといふ蒙古の綠酒をば飲みつつききぬいくさの話
商品を仕入れる錢のなき朝の炬燵にすがる悲しき心
一言のことわりもなく賣られしか小作田に來て案山子をぬかす
何事もあきらめ果てしこの夕窓邊に近く髪すきにけり
たそがれのポプラの道を犬つれてかへり來るなり病める兄上
干柿の選別しつゝこの冬の出稼ぎ先をあれこれ思ふ

星野ひき(秋田)
橋本常雄(名古屋)
鈴木恭敏(東京)
青山新一(長野)
玉虫寛(東京)
森實(鳥根)
向井勝藏(青森)
島維久子(東京)
上田武夫(大阪)
佐伯まさる(鳥根)

踏踏と粉雪の夜を歩み行くかの鮮人に不平あらすな
友のごと強き體を持ちたらばいかによきかと胸せまりけり
心なき兄を持ちたる悲しさよもしやと道に眠る人を見る
信すべき人ならなくに悲しみの堪へがたければ身をば寄せたる
ほうれん草蒔かむと思ひ畦桑の枝結ひあげし畑のあかるし
靄の驛ひそけき中に皇軍のかなしき柩靜々と通る
深々と積りし雪を片よせて隣の井戸へ道をつくりぬ
背の荷物賣れつくしたる安けさや寒き夕べの家路を急ぐ
兒童等の爪切り終へてしみじみと葉櫻のかけ足る思ひあり
職場より戻りてごろり寝ころびてそのまま寝たる去年の夏戀し

高橋一友(京都)
木村道彌(東京)
中澤鶴太郎(東京)
秋篠ナ、子(大阪)
矢部清一(神奈川)
須巳耶董(滿洲)
佐竹信朗(廣島)
小井武雄(東京)
八龍ハル(佐世保)
橋本常雄(名古屋)

笑ひやればうらうらといひて幼な顔この朝かげを唾の子とゐる

夕飯を告げ來し妹に應へつゝ残りの藁を我が打ち急ぐ

寄りそひて父とかざせる手のよごれくらべては見る藁火たきつつ

故里の灯近しいそとと袷かき合せ荷などおろしぬ

野の歸り鶏舎の中に新しき卵三つ四つあり一つをすゝる

使はるる身のかなしさにこの仕事無理と思へど黙つて仕遂ぐる

おほらかに黄ばらの花を描きたる晴着を母は好み給はず

流れゆく身はなげかねど別れ來しわが子の顔の忘れがたきに

叛逆の心にふれる恐ろしさに黙して今日も人と働く

床すれの痛みに堪へて弟は泪たゝへつすなほなりけり

岡 夕 咲 (東京)

中江忠一郎 (滋賀)

木引静子 (京都)

杉田静緒 (王子)

芥平 章 (大阪)

小井武雄 (東京)

加藤時子 (愛知)

杉 ミマナ (茨城)

城 健 而 (新潟)

さゝ・丹 吾 (京城)

公園の陽だまりに寝る人あまた職ある人か職なき人か

妹は何か母にし告げたらむ口には出さね我を見守る

親一人子一人と言ひて勵み合ひし父の御墓にわれ立ちつくす

この山腹に富士を眺めて育ち來し十幾年は懐かしきかな

憤りのやり場わからずもみくしやし電車の中に我も苦笑す

身體を一部つぶされしまま動きゐる蟲に似たりとわれを思へる

先生さま食べてくだされと藁紙に包みくれたる露の藁の青さ

夕陽をうしろに立ちし職工の肩がつしりと影をつくりぬ

夏の夜の川に遊べる子供達我を見つけて集りきたる

寮生活も三月になりぬ中庭の紅ばらをとりてコツプにかざる

杉田静緒 (王子)

高 梅 乃 (不明)

佐々木兼義 (島根)

緑川みな子 (東京)

水 木 淳 (東京)

住 田 稔 (福井)

須田正平 (長野)

山口しげる (東京)

川瀬小波 (盛岡)

南條いさを (大阪)

雨蛙しきりに鳴きてあたたかしたそがれつめて桑つみにけり

賃金の高まることのみ願ひ居る夫の思想に親しみ持てず

すしづめの大型バスにゆられつゝ徴兵検査受けに行くなり

月見草ゆりたわめつつ大き犬暮れ残りたる河に下りたり

やあしばらく瘦せちやつたね會ふ人の言葉きまれりぎんざ歩けば

ひねもすを機械の動き見つめて日暮れとなればまなこくらみぬ

わが装ひいつしか地味になりゆきぬ四十路に近き人を思へば

たらちねの野邊の送りに穿く足袋の白く清しく哀しかりけり

秋晴れの窓ひらきつつ今朝の熱を患者につげぬところ明るさ

おほよそに見過してゐし新聞を田植を休みの今日ぞ見なほす

江 香保子 (愛媛)

高橋もりゑ (京都)

隅田逸郎 (東京)

千木汀子 (福岡)

瀬崎千鶴 (兵庫)

木地挽夫 (石川)

秋篠ナ、子 (大阪)

熊谷米子 (名古屋)

夕月唄子 (東京)

井上種吉 (兵庫)

履歴書を差出してもの言はむとす我が目おもはず媚びるたるなり

なぐさむる言葉も知らぬ吾ながら友を誘ひて淺草に來し

徳あらばゆるさるべきおこなひもわれ至らねば譏られむ身か

胸を痛む少年が吹くハモニカは軍歌なりけり今宵もひそかに

何ものにかただすがりたき心なりふるきをみなの一人ぞわれは

国防のエプロンにかくす老のつかれうしろ姿に涙おぼゆる

何やらん大いなる反逆を覺えつつ鐵塔よちてペンキ塗り居り

萬歳の聲に應へて擧手の禮、友の笑顔の頼もしきかな

文覺の無爲を罵り酒飲みし友の事業も成らざりしかな

つはものために旗は振れ今征くをわれが兄と思ふべからず

大竹胡登子 (青森)

井尾瀬梧郎 (東京)

谿 藍子 (岐阜)

水木 淳 (東京)

原田静子 (福岡)

佐々木正子 (滿洲)

藤山 清 (岡山)

小役丸 比佐緒 (八幡)

平井青踏 (大阪)

田代 操 (大阪)

獻金箱の前をすげなく通る切なさこの貧しさに胸せまりくも。

三度目の軍事郵便手に取りて友の命の尊くなりぬ

秋草の校庭に立ちて銃とればつはものさびてわれは勇まし

兵を送ると日の丸の旗打振りて病後のわれの身は疲れたり

何となくわびしき店に菓子買ひて小さき童のいとほしくなる

さわがしといつも叱りし子ども等の門に來ぬ日は淋しかりけり

十人に秀で得ずとも一すぢに清く生きよと母はのたまふ

小説を讀みつつ机に向ひゐる我を勉強と母は見給ふ

時はいま非常時なれや子等はみなくさごつこに餘念なくして

我が家の古き造りに住みなれて西洋館に住みたく思ふ

木地挽夫(石川)

武智晴生(大阪)

喬木 往(山形)

望月周次(静岡)

富春哲二(不明)

金井 香(和歌山)

か ず 女(名古屋)

西岡春重(香川)

角屋紫蘭(東京)

佐和田茂子(東京)

秋の雨のしみ入るからに冷たさよ靴に大きく穴の開きたれば

軍人の兄に向へばおのづから我が言の葉も強くあらたまる

初秋を寒むしと病めるいもうとは笑ひ淋しく足袋をはきたり

戦線より一度もふみの來らざる兵士の上につつがあらぬか

一死報國召されし友はこの四字を葉書に書いて送り來にけり

女われ手柄はいらずすこやかにかへりきませと旗ふりにけり

寮生活に今宵こそおもはるれ冬着を待てど未だとどかぬに

久々に歸れば妹等亡き母にかはりてわれをもてなさんとす

歸り來て野良着のままに火をおこす母は短かき日脚言ひつつ

初めての訪れなれどわが夫の親しき友ぞ心安けき

後藤茂太郎(山形)

岡 正 治(大阪)

森 山 省 式(福井)

秦 きみ枝(神奈川)

高橋 一 友(京都)

瑞丘千砂子(東京)

南條みさを(大正)

福田光吉(東京)

村上三郎(静岡)

石渡とめ子(埼玉)

今にして何の便りもなければと憂ふる友の母を慰む
 輝かしき凱旋の日を想ひつつ力のかぎり旗を打振る
 前線よりかへり來れる君なれどいくさのことは語らざりけり
 一人子の我をはばかりあらがはず老いゆく母に心寂しき
 命生きしことを自ら疑ふと戦地に書きし文を今日讀む
 信すべき女の友はなしとかく心いたしもわれ女なれば
 納税の期日間近し不足金調ふるべく鶏賣りぬ
 壇上のりりしき君よ手を叩くことさへわれは忘れてありぬ
 とたん屋根に音しておつる雪しづくききつつ覺むる今朝あたたかし
 二重丸の清書を吾子はかざしつ々苗代作る我に見せに來る

岩淵飄花(京都)
 廣田秋治(富山)
 沖 一 二(東京)
 水島歌也(熊本)
 中江静雪(福岡)
 西城貞子(新潟)
 南原啓作(福岡)
 岡 政子(大阪)
 西山文子(大連)
 杉本三郎(静岡)

たゞ一人の親しき友がこの日ごろ東京へ行くと言へる淋しき
 兒童等の歸りし後の教室に一人のこりて清書をはりぬ
 園兒等の球技にまじりさびしさの堪へがたければ病み疲れつも
 長旅ををへて歸れるわが夫は子供のことをまづ問ひにけり
 勇士らが壯途にのぼる停車場の彼方に聳ゆ富士の高嶺は
 街の風すすしくおぼゆ行ききする女の腕のあらはとなりて
 童貞われ麻羅握らるる面はゆさ直立不動身を引きしめつ
 山躑躅明るき岨路下りゆけば出征旗の中に鯉幟見ゆ
 ところなき雀の奴が盆栽の桃花ついでみて臺なしにせり
 おそくなりし我ははぢつつ机にて荷物とくなりほほのほてるを

柳原カヲル(愛知)
 富 美(京都)
 八龍ハル(佐世保)
 江川ひろみ(大阪)
 田 中 研(埼玉)
 清水唄子(東京)
 松枝信之(大阪)
 金井政一(埼玉)
 平田米國(京都)
 青繪霧子(福岡)

汗ばみて登りつむればはるばると青海ひらく青空ひらく

戦線の兄の便りは封きらず畑の父に見せにゆくなり

わが家に四年つとめし店員もいくさのにはに召されゆきたり

慾いはば果なきことと思へどもこころ安けく暮さんものを

下肥の追肥をはねばくろに出て草生の露に手をぬぐひけり

戦地なる兄より寫眞とどき來ぬ母は見まもりひとりがりたりす

徐州もはや陥ちにけり抗日の支那の青年のおもひやいかに

非常時下杏子を賣りて戸數割を他人より先きにわれは納めぬ

寝苦しき廠舎の夜に戦友の咳をせしあとのしばし淋しき

がらがらと音ひびかせて軍艦の港に入る心強きかも

八龍ハル (佐世保)

木引威元 (京都)

渡邊達夫 (東京)

佐藤金彦 (東京)

木村四郎 (北海道)

平田米國 (京都)

加藤逸郎 (東京)

内田持及 (埼玉)

岩藤健一 (岡山)

八龍ハル (佐世保)

草むらより出でし小蟹は泡ふきて苗田の畔をはひ行きにけり

降り暮れて入り來る患者とだえたり言葉すくなに器械ふきををり

田作りのくらしなるゆゑ父上は今年の帽子またかぶり給ふ

戦場の兵の勞苦を話しつゝ子の我儘を母は諭すも

凱旋の身をば休むる閑もなく友はひねもす田の草をとる

召されゆく友驛頭に叫びたる一語々々の聲のたしかさ

號外を圍みて兒等は口々にソ聯の不法ののしり止まず

殘業を終へて野道を歸り來ればわが家の灯のなつかしく見ゆ

なにもかも高くなりしと卵買ひきて母はいふ病みをりわれは

いきしにを賭してたつべき戦ひに出で征く兄の面のしづけさ

松井ひさし (埼玉)

清水吹子 (東京)

眞島まさ緒 (千葉)

井尾瀬澄夫 (東京)

杉本三郎 (静岡)

平山美都夫 (千葉)

迫口慶之 (廣島)

瀬尾健 (神奈川)

名倉三千保 (宮城)

澤四季夫 (東京)

いつまでかここにとどまる友軍ははや漢口にせまるといふに
こしかたの父の苦勞のかずかすを父より老いし人に聽くなり
張鼓峰一帯の地にソ聯機の猛爆の跡はまざまざと見ゆ
新米のすしをつくりて一線の戦士が武運祈りたりけり
退けければ聲をかけたなり街上の事變あそびの群よりわが子は
おほらかに大陸の秋來れりと手紙よこししつまをしおもふ
わが夫子が召されて征きし穗芒の光れる頃とまたなりにけり
いづくよりうちくるならむいぶかしみ麥の根方に伏して動けず
露もちし草にかそけき月はあり寢の足らぬ眼にしばし見てゐつ
つつがなき早稻の稔りに漢口にひたむかひゆくいくさをいはふ

末盛元二（北支）

野島嘉久三（和歌山）

芝園みのる（東京）

谷口ゆき緒（富山）

木引威元（京都）

仁衛砂久子（大阪）

八龍ハル（長崎）

船木悲路子（北支）

山田虹二（天津）

玉垣久康（滋賀）

警官なりしといふ戦友も慰問袋の風船つきてあそびぬ

湊田浩太郎（戦地）

歌 篇 II

空になつたバツトの箱が凍つた道の上にひしゃげてゐて又雪になりさうだ吉川美代子（和歌山）
女は行つてしまつた。停車場のコンクリートの上で僕は下駄の音をさびし
んだ

双葉 照（東京）

働くんだ！ 俺の心は春めいた空へ、煙突のやうに疾走する

武田孝之助（名古屋）

マシンオイルの滲んだ父の仕事着よ、こんなに寂しい匂ひがする

小柳英治（福島）

野菜畠のきびしい青霜だ。未組織農民の明るい呼吸が漂ふ、朝

大貫 博（栃木）

汽船の發つたあとの港町の静けさ、空には風などがあがつてゐて――

町子一二三（東京）

栗色の頬、制服のバンドをきゆつとしめた女車掌にたまらないとしさを

感じる

山本徳太（静岡）

見ろ！ ぐんぐんと素晴らしい太陽の弾力！ 起重機は海をまたいで、空は

晴れる

萩原水郷子（山口）

ずらりと並んだ病床に、ひとりひとりが眠つてゐる患者

沖 莞 介（東京）

二三日しかみられない米俵を土間に積んで煙草を吸ふ

小川北斗星（千葉）

さつとすき透る鮎の腹、飛沫は青空を斜に断ち切る

櫻 まさみ（千葉）

さもしい心は出すまい。あたたかい麥に納豆の朝だが――

じゆん・すゞき（栃木）

春近いといふ事が喜びなのだ――私は息をきらして土手を走つて行つた

伏島 啾羊（宮城）

橋脚にうづまく雪解けの濁流、見ろ！ 鐵橋の強じんな意志

岡 長 榮（大阪）

焚きつけたペーチカの燃えのよさ、女よもつと大膽にならうよ

須美 ひろし (北海道)

劇場の扉閉されて流れる月光、花賣娘は肩をすぼめて歸つてゆく

零 子 (大阪)

蒼穹へのジャンピング！ 女性群は軌道外の青い青い蝶となる

山崎正八郎 (函館)

白聖の病舎。検温器を持つた神経質な看護婦の手は白すぎて

瀧 京介 (東京)

明朗な五月の朝空！ カーンとひとつ、ホームランでもカツとばしてみた

くなる

御室寺紫風 (新潟)

今日も曇天、ペタルをふめば、乾いた路面が、細々と遠い

佐竹三郎 (東京)

硝子窓をあけると、錫のやうな雪が光り、チエホフの朝が来てゐた

原 修一郎 (横濱)

私の描く風景のなかに集み込んできた女は重い荷物を背負つてゐた

森 信 (福岡)

僕等のざつくばらんの生活のなかにも、馬鈴薯の味覺の残る寂しさがあつ

た

有馬榮策 (北海道)

眼をつむると、灰色のフィルムに揺れた思ひ出が寂しい！ といつて私を

抱擁する

河本 勇 (山口)

朝の舗道は緑の影になる。僕はネクタイのない胸を青く染める

劉 吉 (福岡)

五月の空が光つてゐる。紅葉の中にも若葉が薫つてゐて

寺崎みどり (茨城)

春、夢二の繪をポケットに入れて外へ出たら、苦力達が日向ポツコしてゐ

た

西里さき子 (大連)

酔牡蠣の冷たさ。よなべを終つて皆寝てしまつた部屋で夜食をたべる

横尾與惣次 (東京)

私にも世間並に春が来る。汚れた足袋を脱がう。

涼 士 曄 (福岡)

幸福な人間に見られるのを怖れて、裏庭でシャツを洗つてゐる

夢村草之助 (盛岡)

木靴の音たてゝミルクを買ひに出た、夕の虹、街で彼女とばつたり逢つた伏見 宏（目黒）
連翹の花陰、白い露臺だ。今朝も女が走り出て来る 高澤鎮宏（東京）

空いろの切符は花の匂ひがして、日にかざす夏手袋が腫にいたい 柿沼喜一（東京）

青い空、新らしい季節の匂ひがある。若者のやうな七月の朝です 新保五郎松（新潟）

色褪せた思ひ出のなかに、少女はつまらない一匹の魚になつてゆく 小林止朗（佐渡）

風になりたい、あつちこつち飛んで廻りたい、体温表に監視されて居る

俺！ 吉川 丘（福岡）

額が冷たいと思つたら、いつか窓のそとに、裸體主義の朝が来てゐた

セザンヌの模寫に嫩葉の翳。私の午後にも幸福がある 横尾與惣次（東京）

殺した蝶の燐粉が指に着いてゐる。理科の授業を終へて外に出る 鹽山宵二（熊本）

朝、戸をあけて 夜、戸をしめる——押し黙つた私の生活！ 野村晴義（高知）

炎えるグラウンド、アカシヤの木蔭によると、母のやうな匂ひがある 實成 豊（岡山）

パツと開いたパラソルの中で明るい明るい顔が笑ふから—— 麻枝甘奈介（廣島）

朝の療院の窓、季節に無關心な蔓性植物の緑はさみしい 須田昌平（長門）

一匹の女郎蜘蛛を弄ぶ私のサジズムをさびしく自嘲する 木村董夫（東京）

いつもいつもほうさんシャボンの匂ひする。南京玉の頸飾ゆれてゐる 高澤鎮宏（東京）

サボテンと女、公園のお晝はお菓子のやうな美しい風景畫です 圖師英行（名古屋）

白い皿、白いテーブルクロス、切られた西瓜に黄昏が立體的な翳をつくる 高橋貞雄（大阪）

開放されたノータイの胸——窓の金魚鉢に青空がある 槍持虎獅狼（朝鮮）

すりへらされたスリッパのやうな味氣なさを時折り自分の中に見る 岩田春江（東京）

櫛の巨木のがつちりした意志！ 一つの世界観を私に示唆する

蠣崎 稻男 (北海道)

私の生活は一枚の蒸發皿——みんな過去になつてしまつて黴い滓だけが残る

白川 秋 (東京)

モロツコの情熱の中で僕は狂人の様にデトリツツヒの體臭を嗅いだ

後 東優一 (山梨)

女からかへつてきた本の中に、一本のほそい髪の毛が挟まつてゐた、秋！大竹省三 (埼玉)

幾何學的の配置がひたひに反射して棕櫚の影の涼しい午後

双葉 照 (東京)

鐵塔と雲——幌馬車の音がすると、思索の方向がまた故郷へ向ふ

西里さき子 (大連)

季節の色ボタン、一つ一つをはづして踊り子のほの白い脚、あらはになる西尾失曾次 (三河)

眞白なノートの上で戀人の髪の毛が差しがる、あらあらしい情慾！

大竹省三 (埼玉)

かかはりの無い風景の中にまであなたを置かうとする雨の日の悲しい意

欲

鴨下享二郎 (東京)

メランコリーが蒼穹に溶けこむ、窓にはマチスの糸が揺れてゐる

元田 耕吉 (熊本)

アニリンに染つた手を翳したら、午後の空青く澄んでゐた、秋！

椿 森二郎 (岐阜)

コツプにまざまざとのこされた指紋をみて、私は今日も生きてゐる

毛利 昇 (東京)

路次へ這入つてから、鋭くせまつてきた河の、限りない迫力を喜ぶ

毛利 昇 (東京)

風が吹いてゐる。風が吹いてゐる。眼をつぶつて私の存在を考へる

池田 榮一郎 (東京)

お客の前では朗かな雲雀が、家に歸るとやつぱり黒い一匹の蜘蛛でしかな

い

谷口 正三 (大阪)

窓——四角な思想——七月の風景と生々しい飢餓感！

白川 秋 (東京)

苛々する自分を連れて外へ出る、ヤシとシユロの並木道、何處まで行けば

氣が晴れるんだ

山崎敏夫(盛岡)

三等病室の窓に碧い空が揺れて、私は海圖をもたぬ航海者となる

服部晃二郎(千葉)

強烈な意力だ、電線がびゆうんと張りきる、冬空!

塗間音吉(東京)

しろじろと洗面器の中で、光線は一人の少女になる朝!

孤林茂雄(新潟)

冷たく笑つて逝つてしまつたあの人の頬の薄痣。スリイキヤツスルの烟が

ゆれてゐる

爲森千鶴(大阪)

しんと静かな空のオリオンから、眠れさうにない豫感が来る

福島秋人(三重)

喰つても喰つても喰ひ盡せない哀愁——人々は秋だといふ

守屋喜與志(盛岡)

季節にかかはりはない幾何學的な生活、赤の青のカクテルの中で今日も生

きてる私

服部晃二郎(千葉)

人波に吸はれて行く僕の前に、金本位崩壊國の都會が笑ふ

鈴木十良三(大阪)

冬、冷たい斜線を引いて、色彩のうすれた故郷の地圖が寒い

藤田茂都子(東京)

窓あけると親しい親しい朝の訪問者! 太陽に生活の旗をかゝげる

僕の片目に少女がある。少女は、時々うすれて僕をさびしがらせる

双葉照(東京)

にんじんが畫くペン畫の中に、ゴムで消しきれない哀愁がある

神作凡兒(大牟田)

季節の晚餐。人ひとり來ない食卓の上に冷えきつた紅茶のやうな私を見出

す

荒木勉(大牟田)

狭霧のやうにしぶく日光だ。充ち足りた幸福感が、坂道の下に擴がる

鴨下享三郎(大阪)

陰つた町から持ち出した水槽の中で、魚は矢張り生きてゐた

毛利昇(東京)

薔薇色の道のはてに、彼女の白い齒が二本落ちてゐた

熊倉双葉(東京)

足、足、足。冬の舗道にあらあらしい生活意識が散らばつてゐる

日影 満（東京）

今更のやうに花瓣の紅さに驚異をかんじた、私の新らしい生活であつた

永見美房（島根）

ゆふぐれの静かさは、組立てられた鐵骨の上から、青く翳つてくる——冬

空

川内良一（大阪）

夜更け、黒い喪服のをんなは胸に一つしかぼたんをしてゐない

小林輝正（東京）

白い病院の螺旋階段、まはる換氣筒の中にある私を感じる

阪本明正（東京）

港はさびしいアロハ・オエ——雪に刻まれた足跡をみたまへ

小澤 晃（東京）

トラックの助手である友の朗らかな笑顔が通りすぎて——朝の舗道

城 健 而（新潟）

中指にこんもり盛り上つたペンだこ、たまらないとしさを感じる

高須繁保（愛知）

ボードレエルよ、雲が流れるから、ぼくは二月の窓をひらいてゐる

大村章郎（島根）

豆の花咲かせて、パンを蒸す家——けさもはれあがる霽のあかるさ

柿沼旗一（東京）

風の中を口笛が飛ぶ、たちまち小さくなつた僕が飛んで行く

相田朝男（宮城）

燕が来た。古い帽子を冠つて妹の花束を買ひに出よう

千種菊之助（神戸）

故郷の町にもアドバルーンが上つてゐる。戀人の洋装に新らしい愛を感じ

た

十 條 薫（東京）

雪と樹木達と——ひろびろと私の胸に青い朝が来た。透明體の山にのぼる月上榮一（埼玉）

埃だらけの地球儀を廻せば、赤道の赤い一本線があらはれる、初夏！ 須賀野二郎（東京）

網棚の旅行鞆と、揺れてゐるつり革と、すつぽり私を裏むうすい膜！

齒を磨く鹽、うす青く掌にある——季節の切符を受取る、朝

柿沼旗一（東京）

パラソルです、エプロンです、小さい家です、朝顔の花です、いつか子供

を抱いてゐる

小泉慎三（東京）

朝が私を窓に位置づける時、ゼラニウムは赤い花でした

小石恵三（大阪）

ひら、ひら、體のなかから蝶が舞ひ立つ。菜晶の黄色い感情

永見美房（島根）

深夜、手に持った蠟燭の先で、かなしい人生の哲理がゆれてゐる

實木伸（栃木）

六月の窓を開けると、杳かな成層圏からへうへうとして降りて来るもの！西尾矢曾次（愛知）

雲に故郷が映つた窓。いきいきと女學生が通る。朝！

高田うさく（京都）

初夏はまぶしい杏の花と蝶々と戦利品のやうな古びたパイプと若者！

青山季弘（千葉）

雲よ！遠いくもよ、赤い風車が廻るんなら、僕もあけつばなしでバット

を吸はう

原田文夫（東京）

膝の上の仔猫が眠つたら、少女よ、新らしい季節の話をしよう

川内文一（大阪）

黄昏——私の意識が白い葩のやうに揺れて、かすかに女の翳が匂つてくる
ではないか

船見正朗（北海道）

微風にゆれるフレツプの花の下で桃ヂヤミを煮る白人の女（青島紀行）

青山季弘（千葉）

オレンジエードを飲んでゐる貴女と僕と、僕と貴女とサロンの窓の日は高

い

關實夫（東京）

クレヨン畫の明るい風景の中へ、小學生の私が遠足に出かける

永見美房（島根）

飛行機のプロペラの響——臥てゐる僕は、薬瓶に透明な空を感じた

井上菊夫（神奈川）

紫陽花のはなにある翳をみてゐて、眼を病む少女を思ひ出す

士口徳（東京）

野茨が白く咲いてゐる、幼い日のあなたが、いぢらしくなる

月島玲一（大阪）

季節の乾杯、明るい少女だ、白いコップにメロンが映つて、私の部屋にも

微風がある

中尾文郎(熊本)

僕の中に漲る若さ！ この緑地帯よ。展いた朝の窓が一つ

江川比呂(福井)

白いパジャマをぬいだ少女、朝のカットグラスに盛られたいちごだ

横地美須(不明)

翳が幾つも重なる。たつた一つの窓の明るさが、やはり私を生かしてゐる三宮

博(東京)

四角な窓にも、白い雲が流れてゐるから、僕は季節の傳書鳩を飛ばさう

谷三樹夫(函館)

雪の下の花が散つたよ。用もない笑顔が庭に浮んで此のごろませた隣の小

娘

熊倉双葉(東京)

パステル畫の明るい光の中に、木靴をはいた子供の私がある

谷三樹夫(函館)

フリユートは白い思ひ出の音いろ——目をつむると、おかつばの貴女があ

るいて来る

原田文夫(東京)

幾何學的な構圖の中で今日も一日、躍りつづける彼女を思ふ

山崎敏夫(臺灣)

ウインド・クリーナが單調な音を立てる、雨にけむつた狭い幌の中の人生志緒宵兒(熊本)

そばの花の、しろい清らかさ、その花のなかに母の清い十字架があつた岩下志津夫(熊本)

燕は可愛い、町の小娘、ふつくらと白いエプロンを着けてゐます北原しげる(和歌山)

蟲が啼くと、ひそかな季節の吐息……私は白い距離に置かれる津田欣二(神奈川県)

土間のほのあかりよ、この家の冷たい空気を照らしてゐるのか藤尾雪二(長崎)

雑草には雑草の影があつた、妖しい欲情を抑へ抑へ私は歩いて居た瀧一彦(福井)

朝の舗道一めに光り街の女から受取る広告マッチの明るい構圖山岸宗夫(東京)

自分の影に新らしい親しさを感じる、今朝も亦生きのびたといふ悲しい歡

び——

横東階七(東京)

笛になる青竹の青々とした濡葉です、雨の朝です

岩城いづみ（群馬）

朝、山に新雪がきた。妹よ、貴女の黒いキャツプはさびしい

佐藤 壽（熊本）

フレンチ・ヒールの爽やかな朝のひびきからあなたの新しい生活を感じ

た

原田文夫（東京）

メーブルヘンの竹人形が君に似てゐる、アイーコの、栗色のたぼたぼした髪の毛！

藤 一夫（瀧松）

衣裳を着替へた街、風のやうに、靜かに過ぎ行くもの、秋！

守 哲朗（京都）

コロコロ口笛吹けば寒い唇、僕の感覺線に秋が来た

佐藤 壽（熊本）

秋の木靴はいて、一人通つて行つた。山が明るく晴れてゐた

後藤 十九（岐阜）

詩 篇

火 事

浅井 正平（旭川）

それは闇にひそむ油虫が……

眞紅の旗を抱いてなだれなだれ行く軍勢

月は鹽酸を飲下した憂愁よ——はりさけた

人間の憂愁よ

かくて一もとの歴史はいたましくも焚殺され
行くのか！

しかも、然し人々よ

沸騰した一群に森然と聲をのむ一脈の静けさ

を知るか

あゝ敗亡の軍勢に人の世の涙を送る人 人よ

今は、もう石と化してこの静けさを見守らう

ではないか

水の様な何かがひたひたと胸をうつ

顔が燃えてゐるのではない——かすかに臘が

流れてゐる

あゝ又しても地球の一角がくづれて行く

私はその中にひそむさやかな佛のいのりを知
つた。

暴 動

眞海 鷹司（東京）

曇つた空だ——
虚空を掴んで最後の號泣

——根こそぎだ
——俺達の生命は根こそぎだ

次から次へ倒れて行く生命
過敏な農人の神経

恐怖が末梢神経から、潮の様に首脳部に押し
よせる

暴動◆
こんな日だ、人の氣が狂ふのは——

散歩だからゆつくり
歩まう

水谷 辛夷(山形)

何處でもかまうものか
ゆるやかな野原だから
枯草を集めて腰を下さう

荆棘が胸を痛める

刃物のやうなひらめきを感じながら
瞬間俺は悲しいヴァガボンドになる

鴉が地獄へ行くのなら俺も行かう
いそげつて ふむ

三日月が頻りに俺の縮髪を梳いてゐるのだ
ゆつくり歩まう

落葉

角田 政夫(千葉)

掻き集めた落葉は
焚きつけたら
何かしきりにつぶやきます

白い煙がのぼつて
瘠せた枝先を肥します

それはイエスの目にうつります

おゝ 掻き集めた落葉は
白い衣をいたゞいて
もう 何もつぶやきません
軽い風に乗つて天へのぼるのです
私は静かに云つた
「暖かくなつたらまたおいで」と。

柘榴

赤木 壽(岡山)

秋晴の透明な青空に
季節の爆裂弾がぶらさがつてゐる
眞紅にはぢけた

そのグロテスクな表情は
空虚なぼくの生活を破壊して
赤い灯の下に誘はうとするのです。

ぼくは
ぼくの純情を奪つた女への慕心を押へ
匂ひのいゝ澄んだ空気を
たつぷり胸につめ込んで
此の季節の爆裂弾を
一粒、一粒噛みしめよう。

A ブオンジ・オル・フラテ
ルロ(今日は兄弟)

領木 得二(岡)

愛を求めて色褪せた……僕
水蒸氣の様な林檎畑で
青い林檎の葉の向うで
さうしてお前……エリオ

×
僕等はコルシカへ渡らう
二人して、温室のやうな冬を過さう
雑木林の奥でパンデーの装ひをしよう

×
空の遠い日
僕はお前……エリオを抱き
ピエロを草原へ急がせよう
チーズとミルクが缺乏した
ブオンジ・オル・フラテルロ

B 都會は病んでゐる

1
シネマ歸りのビルディング街
傷口の様な三日月にプラタナスの葉が鳴る
カラカラ カラ
立てたオーバの襟へ屋根の風が落ちた
赤煉瓦のビルディングよ
今日も又、氷つてるのか。

2
角の街燈は溝を照してゐる
奥の方で、チクオンキが騒いでゐる
……
十八時のズボンの下で月映えたしすくが光る
箒のやうな風よ、

今買った靴下だよ。

3
ビルディング街を獨り歩くのは悲しい
深夜の電車は中で囁く乙女が恐ろしい
螢の様な下水道のカンテラの向うで
チロチロ チロ
水が流れるよ
氷つて流れるよ。

月 明

丘田まもる(平壤)

とほくしらじらと月明をよび
みもこゝろも

ま青な竹馬にのつて
だまつてあゆんでゐる男がある
鶴のやうな思素のあしどりに濡れてゐる

青い砂はひそやかな渚をめぐり
哀愁はしんとしてはてもない

小さい唇を月の匂ひにひらけば
なんとまた白い齒なみに
静かな海のうつることか

ふかく鱗をたたんだ魚の影像を感じてゐる
海の氣にうたれて
男は鶴のやうに竹馬にのつてゐる。

世 紀

塚本哲一郎（藤 本）

盲ひた群像の行列が
蒼白の月夜に鋭どい口笛を吹く
青竹は牙を現はし、
地中に髪の毛をゆさぶる、
地球を席卷した風は
閃々とするはしを振りあげ、
きらめかし、押しさゝへ、
あゝ、幽閑なる溪谷より
足音を鎮め、
言葉を洩らさず、

平原のやうに

彼方の暗闇から

一齊に剣を抜いた、

風！

ルンペンの詩

三宅金太郎（静 岡）

あをあをと猫の眼はみなぎり

青竹は白布を感ず。

つるはしは腐れ、

人間は腐れ、

あをあをと寢室にひろがる足跡。

ああ、かかる時

世紀は幽遠を行く皮膚を欲す。

(A)

雨が降るから

山へ登らう

松はその青い手で

頭を抱へてふるへてゐる

幹を押ししたら

灰色の泪がこぼれた

四阿亭で

悒鬱を喰べる

(B)

びつたりと

来るものがない

肺菌に蝕まれた胸は空れ洞

ひそひそと嘆きつづけるが、——さて

何を求めて泣くのか。……

シネマとカフェーと——

暗い巷路をうろつく。

(C)

女の手が石より冷たい

眼を落した私の背で凧が騒ぐ

さあ 立上らう

とも角も歸らうよ

我慢して寝てしまへば

又 明日の日がやつて来よう

凧のあいさくに

胸を搏つ哀音がある

下積みになつた去年の落葉が

空しく朽ちて行くルンペンの詩をうたふ

こんな風景

みやぎ・ゆめんど(東京)

まのぬけた太陽は枯木にぶらさがつて

べそをかいてゐる

その下で

乞食はからつぼのポケットに手をつゝこんで

でつけえ欠伸をひとつやりそこね

みすぼらしい涙をポトリ……

手のひらでうけて ぢーつとみつめてゐる

おゝ 神様よ おいでか

こんなあはれな風景をおつくりになつたのは

神さまよ あなたか……

冬の風は あまりにも無情です

笛をふく——

笛をふいて麥畑を行くと

昔聞いた歌がきこえてくる

悲しみは帽子へ入れて

微風といつしよに捨てちやはら

笛をふく——

僕の心は、だんだん青くなつて

麥の穂になつて終ふ

養鶏舎の見える風景の中で

ぼくは一人で笛を吹く

F l u t e

不二信之助(静岡)

少年

堀部讚智運（岐阜）

佗しいまゝに
流れをあさつてゐた少年は
紅い魚を探し出すと
それを食べてしまつた

少年はその日から
竊かに泣くことを知つてしまつた。

朝鮮

岡田まもる（朝鮮）

しろい紙をひろげて
古墨をおろしてゐると
部屋は水氣をはらんで
茶の花の匂ひを感じさせる

せめてこの匂ひの中で
静閑な郷愁の明さを呼ばう。

雪

室 幸之助（旭川）

調子はづれな流行唄と
季節はづれな雪――

一本の電線が
そのまゝ夢のやうに昇天する

あゝ……
旗がゆれてゐる
新しいニホンのハタがゆれてゐる
梢がゆれてゐる
昔の梢がゆれてゐる

丘の上に
あゝ……丘の上に
女の影が倒れてゐる

凡ての窓は
青い光のまんまくをしめきり

雪色の部屋の中で
手品をしてゐる道化もの

女と僕と……
僕らの徑にも雪が降るのか
季節はづれな寒帯がおそひかゝれば
ツンドラの下に二人つきり
ペチカを燃して抱き合はらね

月と戀人に送る詩

川崎 民雄（宇都宮）

わたしは松の重さと
濠の深さを考へる。

あなたの心を知りたいばかりに
まだ眼覚めぬ松の實を食べる。

わたしは手長猿

さいかちの枝からあなたの姿を汲みとらう。

うぐひすの笑ひ聲を聞いたのは昨日。

今日はいつしんに鏡をふいてゐる

あなたの心はこれに寫るのです……

尻ツぼのない風景

稚内にひる（大阪）

失業者

誰だ！

クリストに頬づけしたといふのは――

クリストが居るなら

今日も

こんな男を抱かしてやらうに……

ゴミ箱の底に

パンがある……

パンを食べよう

飢死するのは嫌なことだ

だから――それとも

人間を廢業しちまはうか――。

服は埃を吸つた

靴は泥を食べた

今日も俺は

凍つたゴミ箱を

漁つてみようか。

夏の野邊

角田如翠泉（千葉）

お月様よ 知つてるだらう。

遠い野末で日が昏れて

石碑をきざむ夢を見た

それは節の無い筍のやうに

かなしい夢だつた

お月さま。あなたもか――

女の兒と僕

T・M・S（不明）

そんなに偉くならうとも思はぬ

三日月の夢だ

佗しいまゝに

眞夏の野邊をさまよへば

死んだ弟が遊んでた

子供のやうにころがつて

西瓜畑がある

三日月はきれいだから――

三日月は梳きとがれるから――

僕は夢をほこらぬ

その爲に偉くならうと思はぬ

「貧しい子供は

玩具が欲しくなる度に考へる」と、

それは自慰にならぬ

ゆがめられた鏡にすぎぬ。

悒鬱な午後

伊東さち子(宮城)

あれもいらぬ。

これもいらぬ。

簾の子の上に情熱を乾上らせた

乾飯ぢやないか。

ミュンヘンの持つイデオロギーは

コツプの縁に泡沫を盛上らせもするが

唇をつけない中に消え失せて終ふ。

六月の曇天よ

そんなに悒鬱を押しつけるもんぢやあない。

ザッゼンとした机の上に

ぶすり！ 紙障子を貫いて

空気銃の弾丸がとび込んできた。

無表情な

悒鬱な來客だ。

ある日(門は閉る)

田代 早苗(神戸)

空は蒼すぎやしないかしら

蒼すぎる野原で一人

手のひらをすかして見る

さやうなら

耳をおさへたが

みんなの聲が

さやうなら

あゝ眼もとぢておから

ピラミッド型のトダン屋根に

煙突の影がもたれてゐるから

ほんとに空は蒼すぎる

日曜は來たつて……

では野原にも

私は笑つて

さやうなら。

風景

細川夜舌佳 (滋賀)

これら クツキリ描かれた雨上りの風景に
あの潑刺とした五色の虹が吹上つたなら
おお この 私の 胸の風景には
何色の波が打つのだらうか……

天文臺の秋

石井 瞬二 (東京)

白猫のやうな雪 雪
雷も風景に入れて置かう
空色の風に波うつ
稲や草の緑が
太陽の黄色い光線に燃えてゐる……
農夫は肩に七月の鋤を光らせ
蛙は畦にもたれて七月の喉をゆすぶる

亜鉛色の天文臺に夕暮が肉薄したので
秋穹にクロム色の宵星が
P i K a R i ・ 郷愁を点火する
弧状を畫く觀測塔の圓屋根
冷やかな哀愁が白楊の梢から流れる

その周圍——水色の蝠蝙蝠が

H i R a ・ H i R a ・ H i R a

夜の憂鬱をばらまいてゐる。

反射望遠鏡を覗いてゐた獨身の若い博士は
土星の輪の觀測を終へたので
近々に街の教會で結婚式を擧げるさうです。

アンタレスの赤い想念は遠く西の地平線下に
埋葬されてしまひました。

月の疾病は天然痘だとのこと
「この頃のように夜毎に黄色い熱を發しては、
とても治療の望みがない」と
これは老博士の述懐——

分光器の投影——

青白い研究室でめくる洋書の古ぼけた沈吟。

流星が南方の空にマグネシウムの鋭線を走ら
す——幽光。

寝椅子座のお嬢さん!
もう、お部屋にひつ込まないと風邪を引きま
すよ。

《GOOD・MORNING》

鳩時計が壊れて
星座の廻轉木馬がびたり止る。

失業

小野 龍(福島)

俺の思ひ出は皆んなひからびて
ボール箱の音がする。

一つ／＼單念に拾はうか。――

くたびれた憂鬱が

生濇い欠伸をしよう。

大切なものは何もない。

逆立ちをしようと

胸からほこりが煤煙の様に落ちる。

唄をうたへば
唄にむせて。――

畜生!!

誰が俺を吐瀉したのだ。

あれは地球の泣いて居る聲だ。

地球も既に縮むのか。

あゝ 何處も見えない。

掌で生活のかすがうらぶれて居る。

死後

谷口 邦憲(不明)

1

僕の云ひえなかつたことを

その日森の中の小鳥が

その可憐な歌の言葉であらはすだらう

こんなにも僕の胸を痛めた人生の苦味

それを諸君はと或る夜の小川のせせらぎに聞

くであらう

涙に濡れた僕の瞳

千萬の空の星のどれかが

僕の瞳のもつ悲哀を諸君に示すだらう

宇宙を一貫する理法に依つて貫かれた僕自身
の生

僕は僕自身の中に啓示されたひとつの道を思

つて

度たび慟哭する

僕が僕自身の業を経て

この現象界から解體する日

僕は青空の雲に、森の中の小鳥に

路傍の草に

到る處のそれらの物に僕自身の言葉を與へる

2

今はあらゆるものが僕の咽喉首を押へて

僕に參れと云ふ

僕は生きながら埋れた亡者だ

僕は亡者となつて沈黙する

しかしその日こそ――

僕が僕自身を原子にまで還元した日

その日僕は牛となつて咆えるだらう

雲となつて諸君の心を寒くするだらう

僕が僕自身を以つて購つたところのもの

そのものこそ雷となつて四天を轟かすであらう

僕は僕個人としては一個の無として消えねば

ならぬのだ

それ故僕は小鳥のことを思ふ、星のことを思

ふ

天地の諸物の事を思ふ

そして宇宙の寂しい理法を思ふ。

おツ母あに送る

シカチ(大阪)

家名の挽回が俺の生身を

しわくちやにしちやふんだ、おツ母あ

都が俺に恵んでくれてるなあ

過度の重壓……え、過度の

ヒヨロ／＼草は貧血を起したよ

當然の歸結があざ笑ふ夜に。

骨の形のこの肩へ

お先祖の息吹を背負つて行けと

無理だなあ！ おツ母あ

都會ちや今物凄しい苦悶が湧いて

世の中の脱皮が始りかけてゐるんだあ。

少年工

星野 義雄(群馬)

蝙蝠が露路の暗がり

叩き廻る頃だ

彼が狭苦しい工場から

何時も出るのは。

利慾も希望も消され

只……

おツ母の顔で有頂天さ。

陽の落ちた裏町は

眞黒ぐろな言ひ知れぬ親しみが

覆被さつてゐる。

純な彼は

この黒い宇宙めがけて

遠慮なしの溜息を吐きだす。

そして芥箱の家に歸る時、

おツ母の笑顔と飯の香に

人間味と消されてゐた若芽を

始めて呼戻す事の出来る

少年工さ。

生活にひしがれる

みつみ(長野)

口惜しい涙を拭いた手はざらざらしてゐるの
で喉が痛い

無理はない、土を掘返すうちに
土龍に似て来た私の手だもの

いつそポップヘアにしちやはうか
黍の色のやうに赤く縮れた髪は

青白い手に掴まれてゐるものか
夜はビール瓶に草花を挿し

マルキシズムを覗いて頑張るが
皮肉なことに細かい活字は
催眠薬より効果的です

誰かど何處かから拾つてきた指環を
芋蟲のやうな指に較べて苦笑する

變りなく地球も廻るに

いとしくてならぬ

生活にひしがれた私の青春よ

老石工夫の詩

月原奈美路(長崎)

火薬が爆発したんだ つゞいてひとつ
乾いた青空を花火線香の花が散る

大地が揺り返して見事に石が裂けた

まだなまなましい肉片がからみついてゐる

まつかさの様などぐろい尻をまくしかけ

ホツと休息の煙草をふかす老石工夫よ

その泥まみれの髪と髻のあひだを

あたかも樹膚のやうにかたい頬すぢに

噴出する沈黙と忍従の汗 汗

でも溢茶色の鉢巻をとらうともしない

かぎりない喜びと力に溢れた凹んだ瞳は

深くなにかを思惟しそして何を凝視する

火皿の落ちたキセルの胴腹は叩き潰され

今にもへし折れてしまひさうだのに

——もう 何時かなあ

私はそれほど不用意な美しい彫刻を見たこと
はない

彼の意志と勤勉な手が空へのびるごとに

もり上つて膨大する筋肉

素ツ裸の全體に波の様にのたうつ 美は

健康な人間の鼓動と歡喜を感じる

老石工夫よ!

私の體の中からはすべての考へが煙の様に消
えてゐた

私ガもしも友情を利用しようと考へた時

私の心は呪はれてあれ

友情はあらゆる障害を越えて

いつも二人の胸にあるのだ

世の中で一番美しいものは
戀でもない、女でもない
たゞ心から心へと流れてゆくつなされた
お互のこゝろとこゝろのあたゝかさ
だが、私もしそれに甘えすぎる時
君よ、おごそかに私を鞭つ事を忘れてはなら
ない。

豊作?

北山 雅(宮城)

豊作とは何んだべ?
豊作たア 山と積むだ白菜を
腐さらせて肥料にするごどだべが?

一石の米を

十五圓で賣るごどだべが?

こんなに、安い米が

俺や童達の口にへえりかねでも

豊作だべが?

代用教員のむすこに

俸給を出すかねるつう役場が

まだ村税をセビつてくるす

生きるのは

なまやさすいもんでないが

これが

豊作だべがや?

俺が一生は土くれと 一緒か

布田 勤(熊本)

「無暗に楽しくて」何んも
「物思ふ事もなかつた」チユ若か時も
人並以上に短うて行つてしまふた。――
知らん間に、
「大人になつてる」チユ自己発見をして、
オラ、桑畑ン中で自嘲したこツだつた。

桑ン芽ばツン切つて喜こうどつたのは、
ほんに二三日向ふの俺――
人並に年とつた(?)今日――十八の大人であ

る――

知らんだ、桑ン芽ばツン折つて、あゝ、

何チユ慾の根性に迷うた俺だるか!!

オラ、官人さんにならうて思ふとつたが

俺が一生は土くれと一緒か!!

根かり土を嫌ふ俺ぢやなかつたばつてん

オラ、働りやゝてん働りや゠てん足らん

弱エ百姓は恐しかつた。――

あゝ、不思議なインネン俺ば見た今日

お亡父さん!

オラ鉄ば手離さんだ行かう

舊式ン鉄ばピカピカ光らして

サビくれた鎌はゴチゴチ研いで——
オラ、オラ、
強エ百姓になり切るだ！

朝の詩

大木 志摩（志州）

これでもか！ これでもか！
野良にゆく道で
藪添の霜柱を踏つぶした
思はぬ「時」が惜しくなつて来る。
そのくせ地下足袋は悲しくもない。
肩をそびやかし

鍬の柄をしつかり握つて見る
キラキラ光る刃先には
マルキシズムもマンモニズムもない
一畝は三十歩だ！

掌のたことあか切れに
キヤベツ苗がスクスク伸びるよ。
バツトの煙に収穫が微笑む。

新らしい地下足袋が土に接吻して
朝が始まる

白い月夜

船場 茂夫（京都）

村は月夜だつた

丘も畑も石灰のやうに白かつた

松原の向ふ側では

靜かに海が鳴つてゐた。

親爺のねんねと絆纏に包まれて

俺はさむざむ月を見てゐた

俺が泣いたら親爺に捨てられさうな気がした
ので——

俺は泣かなかつた。

親爺はおふくろに捨てられた俺を背負つて

子守唄を歌つてくれた。

小さな小さな子供の俺だつたが

あの冬の白い月夜に

俺は泣かない悲しみをおぼえた。

人生（一）

谷口 邦憲

これは人生といふ稀代の鑽石だ

砂を握つてこれを磨け

お前の骨を削つてこれに光澤を與へろ

そしてお前の血を撒け

これは人生といふ唯一無二の寶石だ

シツカリと両手で掴んで離すな

人生（二）

巨大なマンモスが天にゐて
俺を俯瞰する

豚の如き俺は地球を這ふ
この生物的現實を黄金にしろ
マンモスが何だ
俺は死線を目がけて一散に力行する

研究室風景

澤 たつみ (岡山)

試験管の雑木林
ビベットは冬枯の楢林だ
無数のシャイレの湖水で
オベクトの魚が泳ぐ。

柵はステイツクびんの丘

コルクの牧草は黄ばんで
試験管立の柵の中は空虚
染色皿はエオジンの火事だ
メスコロピンの煙突には、煙がない。

解剖臺は血液の紅海だ。

禿頭のK老博士は

顕微鏡の度をはずして

ぼやけた女の腫を發見した。

モルモットの心臓に

酢酸かけて食つてしまへ。

精神科行きだ。

印刷工場の朝

室 幸之助 (旭川)

しゆつ しゆつ しゆつ
水雷が水を蹴るおと

あをじろい製版工が紙敷に指紋をのこして
生欠伸を嚙んでゐる。

けさの工場に兵燹^{せいけん}がかげを伏す
銃を装填する武装兵のいびきが
輪轉機に くる くる くる
まきつけられてゐる

鼻粘膜に葩を咲かす燐寸のほひ
酸い臭みが脳機能に爆發する

うすいろの窓にひそむ兵士を

背に白旗が耀いてゐるではないか

燐寸の臭みがオホーツクの霧のやうに――

けさの工場に毒瓦斯が胸をせばめる

挑戦的なあさばらけではないか

くつろひ

宮 星地 (富山)

降りしきる雪に打ちつけられても
小さな菅笠にちっこまり

赤子のやうに足を眞赤にはれ上らせて
今夜もみんなは集つてくる。

薄つ暗い行燈を囲み

ちつぽけなろりにくるまり

冷え切つた手足をわずかにくつろがせ

巧な年寄のおのろけに酔つては

みんな小さな胸の焰を燃したてる

冷え切つた手足はいつかほてりだし
どろんとした眼は鼻のやうに血走り
晝の疲れはどこかへ失せてしまふ。
恐ろしい吹雪の中から
微かに夜明けの鐘が響いてくると

まださめないほとりにしつとりと包まれ
燕のやうに喜んで
みんなは吹雪の中を跳ね歸つてゆく。

石塊

齋藤 二郎 (千葉)

こいつは道にかさなり合つてゐて

こいつは強壓しようとする車輪を

こいつは強硬な胸骨ではぢき飛ばさうと考へ
てゐる

それにもかかわらず車輪は

ガリガリとこいつに噛み喰ひ込めば

こいつは壓した力だけの反動で

車輪をこわし割るだらう

よしやこいつがこなごなにくだかれても

こいつは涙一滴血一滴も流さず

こいつは峻烈な意志の方向を

びつたりと直角に示して

こいつは冷たく光るだらう

こいつはあく迄はげしく冷淡に

齒車の如く相手と噛み軌み裂き合ふ爲に

こいつは路上に身體をくみながら生れたのだ

こいつはぢいと心を沈下させて意志を噛んで

ゐるのだ

互ひに硬い硬い鐵の體軀をふれ合ひながら齒

をかんでゐるのだ

こいつはぐいと上から壓すれば壓する程

こいつは意志を槍尖のやうにとがらかすのだ

こいつらの火をふきつつ

粉とくだかれる時は

こいつは空に飛び上つて 空に喰ひ込んで

星となるだらう 冷淡に光るだらう

こいつは今めざめて時代の動勢を

するどいするどい意志で聞いてゐるぞ。

父よ

福富 玲兒 (山口)

酔ひどれて歸つて

いきなりおツ母の頬つべたに吸付いた父

興奮と羞恥にこんがらがつた母

囃立てる弟妹

手持無沙汰な私

(さびれた工場街から港街へ追はれて)
やつと仕事にありつくにはありついたが
場末の此の一隅は私達にとつてあまりに狭過
ぎた――

「おツ母今晚は歸らないぜ」

親方の張込んで呉れた五拾錢玉二つを握つて
十八の私は赤い灯の波の街へ出よう
銀阿兄は獨身者だから
きつと泊めてくれるに違ひない

父よ

頼りない私の好意を
どうぞお受け下さい

そしてあなたは

せめて今宵一夜なりと
あなたの戀人おツ母を抱いて
心から楽しい憩ひに就いて下さい

眞晝の祈り

西峯 常範(高知)

「夜」と「朝」との迫持の圓屋根の上に
輝くものは眞晝だ
生命の潮流は今ここに溢れ
漲り、淀み、靜かに滿つ。
世界の動亂はとほくからひびき
樹々もみな祈つてゐるやうだ。

永遠の光を浴びたいのだ。

おゝ私はよろこびをもつて生きる
私はあらゆる悲しみの向ふに死ぬる

汽車の走る風景

水原 紅緒(朝鮮)

休息の泉をはこんで來る風よ
茫漠たる雲の波、子午線を過ぎる太陽
私はおん身達と觸れ、入りまじり
粉碎せられ、より生々した自分を取りもどす
見えない星々が空の向ふにちらばつて
さんさんと燃えしきるやうに
私も此處にひとりゐて
美しく、強く生きたいのだ

シグナルが下りた
信號が 上つた
と汽笛――

リズムは急流へと落ちて行つた
これで 次の驛まで

イージーゴーイングだ

今日の貨車は重い

旺盛な食欲は

堅縮石炭をよく食ふ

検査器を見たか

支配勾配だぞ

ねてゐる線路――

上りだ

開ける

バリバリバリバリ やるんだ

さうして

隧道にとびこめ。

踏切にて

菅 悟郎(奈良)

――ソレル――

正しいといふ事はその全社会的義務をなす
といふことの謂ひである。

たつたいま俺の感情を微笑せしめたのは
手旗をツキだしてゐるヲバさんぢやない
遮断機ぢやない
女ぢやない、洋服ぢやない
そのむかふでボカ／＼陽光を浴びてる
「大山郁夫来る」のピラでもないのだ。

ごつくり唾をのむで
ごうごうと胸に電波して来た
巨人の重圧を感じてゐるのだ

鼠の詩

たゞき殺しても

焼き殺しても

日いちにち氾濫する鼠

生れれば食ふその事のために
命がけに闘ふあついらの世渡り
臆病でもあるがすばしい鼠

あゝ今日も俺は

金網にひつかゝつた生活の犠牲者を

たゞき殺しても

焼き殺しても屈しない鼠を

あいつらよりも怙息な心でたたき殺して来た

無題

キミとボクはなにも言はないで別れた

キミは中折の縁を軽くおさへながら

ボクの目に笑つた

ボクも黙つて目で笑つた

それはボクたちがボクたちだけ理解できる
テイ寧な挨拶だつた

キミとボクはフリむきもしないで別れた

——がボクたちはそれで満足だつた

石と小鳥

酒井 恭介（東京）

石は眠つてゐて青い花を開き

鶉は十一月の曠野に来て

その石の歌を啼いてゐる

家

家といふものは暗いものだ

だが、僕等が行くとどのみち明るくなるにきまつてゐる

家といふものは一度は明るくなるものだ

はつこひ

まじめに笑つたりしてゐた

おほ空のやうに泣いてゐた

願髻もまだこんなではなかつた

雀ら

雲の深い空の遠くへ

雀らは飛んで行く

小さくくみんなあつちへ飛んで行つて了ふ

鋭い嘴を持つ鳶でもあるかのやうに——

さびしい形 眼に残る

雲

夕暮れにものみな果て遠く

雲の押しせまる中に

あゝ最早や僕はむなしい眸を閉ぢよう

冷たい涙は野に落ちて

空にまで觸れるであらう

あゝ最早や僕のこゝろまで雲の嵐の音響だ。

雑 草

關 さゆり（新潟）

炎天下を素直に群立するお前の姿がいゝ

のびやかなお前の密集から南洋の密林地帯を

おもふ

お前は處女のやうにたはむれの微風にもあどけなくこたへる

お前からあふりおつる露がいゝ

高雅であり清麗である

これは私に與へられた唯一の洗禮だとめい想をするのが常だ

私の生活は 無意味な平板上の球だ

お前がはえひろがることをしなかつたら

——土くれの上のざれごと

——木かげの午睡

そして私は太陽がなぜ赫々と燃えねばならぬかをしらすに果つるであらう

お前は私のきもだめしに出すのであらう

みみずやうちにはこの頃少しも恐れなくなつた

お前の威力から父をなつかしみ 父の事をおもふ

お前はひろがる文はびこるがいゝ

一畝何歩のこの畑は

私とお前の清らかな道場なのだ

輝しい日毎がある

夕べが來たら靜かに祈つてわかれよう

秋の街の詩

田中 旗二(東京)

インキをこぼした部屋から

しみじみ、秋らしい心になつて

明るい街に出た

なんといふ鮮明な世界だらう

立ちならぶポプラのなみき

ほゝゑんでくる少女の一團

一枚の落葉、それを嗅ぐ白犬まで

こんなにはつきりと天地に影を焼つけて

時計臺の短針はかつきり3

やがて鳴り出す大空のオルガン

忘却の詩、秋の聲

自動車のガソリンに

私は秋の匂を嗅いだ

瞬間、眼をかすめる白い横顔は

私は秋の姿を見た

そして久振りに美しい心を知つた。

足

酒井 恭介(東京)

子供がヨチ／＼と畑をやつて來る

柔かい土をふんづけて、その足は汚れて美しく

私のこゝろの中へたちまち大きくやつて來たので

あぶない！ と、思はず私は抱き上げてしまつた。

暗い灯をともしたそれ／＼の家のやうに
みんな傾いて行つてしまつた

雲のやうなもの

しづ／＼とこゝろの中を通るものがある

雲のやうなものである

こゝろが落ついて來ると

その影が深い溪間に在ることがわかる。

冬近き夜の詩

スミ・マチダ(宇都宮)

女工達

夜明の町へ女工達は行つてしまつた

月明の竹藪を

まつしぐらに横切る白犬がある。

顛へ咲く一簇の花のやうに。

涙して見るコンパクトの鏡に
ひえびえとうつるエメラルドの水星よ。

秋の雲脂

松の古皮をはがしつゝ
よれ／＼に疲勞した盛装の秋を
まつげの先で叩く。

金木犀は坂を下りても
匂ひ寄るいとしい秋の雲脂か。

月

饒造 太郎(東京)

私は月のあらゆる光を

奪ひ取つて

散歩する

月は地震計の様にふるへて

ついて来る

月の顔は

悪魔の虜の様に美しい

——かうして

私は黄金の匙で

美しい夢を掬ひ取つてゐる。

海の旗

秋庭 達(高知)

しい。赤い幕はいつも吊されてゐて、褐色
の獸等と同じやうに、少女たちは滅多に笑
つたことがない。

夫人はホテルの石段を登りきると、振向いて
海を見る。海の上には虹がある。夫人はそ
れを見ると、靜かに唄ひたくなる。ホテル
の中は物音がなない。入口の奥は暗くとも、
海の響は此處へも這入つてくる。そして、
客は何時も海の匂ひをもつて這入るが、匂
ひはみんな同じではない。雨はあんなに早
くあがつた。

ホテルの支配人は再び帳簿をめくつてゐるに
相違ない。虹はもう消えはじめたらう。
街の外れでは曲馬團の少女が墜ちた。

空がよく晴れてゐて、この版畫のやうな海岸
の街を、水兵が胸を張つて通り、それから
腰の細い配偶をつれたペンキ屋、帽子商人
白い犬 風。……風は街を洗つてしまふ
と、海へ出て散つてゆく。海の上には、水
兵の捨てた紙が波に乗つて流れてゆく。
街のうしろの青い家の窓から、恢復期の娘が
顔を出して、手の鏡にこんな輝しい海岸の
街を寫してゐる。鏡には青い着物をきた夫
人が寫つてゐる。夫人は靜かに緑色の眼鏡
をいまかけてゐる。——もう苦しくはない
妾はこんなに秋に濡れてしまつた。それに
町の外れには外人の曲馬團の小屋がかゝつ
てゐる。あそこの少女たちは今日も馬を走
らせてゐるだらうか。小女たちは何時も悲

秋の郊外

キャンパスに秋を構成する
畫家、

山口 俊二(神戸)

健康な太陽の下に、

秋 秋 秋、

すみきつた青空
流れに足を漬す少女、

ユーカリの木影に

石刁柏

アスパラガス

赤い屋根の家、

水江 えふ(東京)

赤トンボと子供等、

道ばたの雑草に

しほれた桔梗、

あをい
ほそい
葉脈は まつげ
まばたけば

涙もでるが

かそけくも

ゆれゆれて

たそがれのいろ

アスパラガス。

さみしいね II

波止場の灯が風に吹きつけられて

ぼくの方へやつてくる

III

めくらの女が

音も立てずに入水した

杳くで白いしろい手を上げてゐる

月

IV

ひとりぼつちで波止場をあるいてゐると

何時のまにか

ふるびたいすばにやの青色の切手が

ぼくの額の上に

いつばい貼られてゐる。

波止場

木下 夕爾(廣島)

I

波止場に軍艦が錆びついてゐる

青い水夫等は

ひとり ひとり

杳くへ 水の上をあるいてゆく

柩車の出る裏門

花 芥 隆

白樺の木肌に夕暮の熱が未ださめない
裏門にからみ枯れてゐる去年の蔓草
その翳から秘つそり出る季節の柩車
私の精神のやうに
祝祭のあとの飢餓よ
色褪せた肉體よ
私は樹木の音楽の中のパイプ・オルガンの
一本の役立たないネチ釘なんだ

白い白い虹の野原

白い白い霖雨のコツテイジュ
黒い喪服をつけた精神
僕はそこで坐つて居るんだ
僕は毎日清潔なんだ。

月のある風景

木下 卓爾（東京）

I
首のない魚の
がいこつのすき間で
月が
II
白い小便をした。

月の胸に巢喰つてゐる
侏儒を知つてゐるか
音を立てながら
月の肋骨を
やせさらばへた手で取はづしてゆく
侏儒を

月は今夜もうめきながら
港の防波堤を
蒼白い手でつかんでゐる

III

つき明りに
彼が
港をひきさらつた……

DOKAN!
杳くで港のいうしうの怒號がする
あぢさゐは無表情に
白い霧を吹いてゐる。

春

酒井信太郎

眞晝の窓邊には愛情のやうにやはらかい陽ざ
しがある。
櫻草の淡くさゝやかな團欒の傍には籐椅子に
沈み込んだ奥さんが、べびいのお編物に餘念
がない。

こんもり高いお膝の上に、おれんぢ色の毛糸の球がころころと光りながらをどる。卓の上の雑誌の紅い表紙が陽ざしにそりかへつて白いふところを見せてゐる。

JOBK すびいかあは なたらかなわるつ
奥さんは紅茶を沸かすのを忘れてゐる。

硬質の抒情

宮林董哉

裝飾窓のなかでは、満開した紙細工の櫻花のかげで、ゴム製の小鳥がないてゐる。ききほれて近寄つた僕は子供の手ののがれて舗石路

の上を這つてゐるブリキの甲蟲を、つい、ぐちやりと踏みくだいてしまつた。その刹那！僕は靴底に硬質の抒情をはつきりと感じた。

水をのぞく

上山 無男（廣島）

白い魚が黒い魚に追はれていつた。
うすあをい小砂が礫の間に揺りこまれ私の顔をつくり空まで深く——沈んだ。そして
不正確な硝子面のやうに

私の體をみじかくし
眞空の中にとちこめてしまつた。

月 蝕

スミ・マチダ

耳垢をとつた夜
歸雁の羽搏きのやうな
遠い音楽は消えてしまつた。
暗いスロープに落ちてゐる苺の火は
早咲きの蒲公英の花か
白い桐林の向ふから自動車の
オーロラが耀りあがつて来る

ああ

おもむろに微風に融けて行く月蝕。

海

田宮 弦

私は咳をする、丁度喜びでもある様に
私は私の咳の中に波の囁きを聞き、鷗のなき
ごゑをきく。
一羽二羽三羽、鷗は私の視野をよこぎる、と
青い紺碧の海がある。海は私のお母さんだ。
その白い乳房のなみがしちに私は私のパシオンを横へる。——私は海水着をきた少女では

ないけれど、私はじつと海にいだかれ去りゆく咳と青空をながめる。私は私の涙ふエスブリを感じる。私は私の手にふれてみる、私の心にふれてみる。海水着をきた少女ではないけれど、何と私の冷たい事よ。私は私の心の数を数へる。丁度鷗の數に同じい私の心を。そして今一羽、青い空と青い海とに最後の私の鷗をとびだたす。

梯子

酒井隆雄

橙色の灯に頬を染めて
ちつと遠くを眺めてゐる女よ、

はるかに聞える海のひびきよ

僕は彼女の胸の梯子を登り損ね
傷めた胸を抱いて吐息してゐる。
ひたひたと心を包むたそがれの冷氣
なにも考へてゐない様なその瞳
唇にあどけない微笑のかげが走つた。
それ故に僕はまた激しい焦燥をおぼえ
痛む胸をそつと抱いて
ふたゝび彼女の胸の梯子に手をかける。

第一の冒険

落合静一

とほくの蔭で夫人は波のやうに脹れあがる
私はそのバウンドする腿をモノクルの裏に見
付けた 唇が嘴になる日はいつであらうか
知らないもののイット イット 音楽のやう
に昂奮する口笛を流しながら 夫人はまだは
るかなウインクを繼續してゐる 逡巡する海
岸の一瞬 忘却は砂の中へ逃げ 私は衝動の
やうに海へ投げられた 悲劇 夫人が両手を
あげれば虹はテエプの様に陸へ振まはされる
腰の黒子を愛撫しながら 遠く私は母の喫ふ
莖の煙を眺めたのであつた

日記のなか

パイプを口に
僕は五月の窓から足を垂れる

胸のうすい少女は

もういい？ と訊きながらパイプを出てくる

何がもういいなもんか

海の上を飛んで行く白いスカーフ

少女はパイプから足を垂れる

青い波がスカーフを追つて行く

僕は少女の胸のうすさを目のなかではかつた

少女は今日も外出ができない

お歸りよ 風景はまいにちいつしよねえ
遠くで接吻してゐるスカーフと海

さよなら 少女はパイプの中へ入つて行く
僕は足のさきに水を呼びはじめた

惜春譜

乾 卓爾(東京)

馬車は野や山に
ゆふぐれをまきまきかへつてきた

ぼぼう——ぼぼう

角笛が馬の背中で鳴つてゐる
馬の耳許には黄色い晩春の黄昏がある

白いおばあさまの髪がふるへて
さよならする晩春の風は佗しい

いつの間にか

わたしはおばあさまの糸をくる
音の中で眠つてゐた。

ふらぐまん

大野 勝造(東京)

しろい月は

ひそかに呼んでゐるのですが

x

可哀想に——

ひるがぼは ぐつたりと
力がなくなつてしまふのです

x

おや こんなところに
ローレライの

金髪の少女が……

青白い月夜には

湖もゆめをみます

x

おうろらに輝やく海に海豹の群と遊いだら
夜は高い高い氷の塔のてつぺんで
ぼくは星がたべたいな

MEMOIRE

布野 謙爾

湖はつめたく凹んで冴えかへる日が多くなつ
てゐた。私は喪章をつけてゐた。

私は齒をわづらつてゐた。風が吹くたびに

齧齒カシバのなかで 玩具の機關車が軋んだ。

私は戀人の名を間違つて記憶してゐた。

夕暮 ママと花屋の店先きに立つてゐる彼女
は小さく見えた。

薄ら明りの中の彼女の足は山梔の花より白つ
ぼくたよりなかつた。

その頃私は リルケの詩集を枕がみにおいて

眠つた。ランプを消すと その佗しい祈禱は
私の寢床に入つて来た。
私の母は亡くなつてゐた。私はをりをり、
思念の外を降る時雨を聞いた。つめたい壁を
背にして。

暮れがた

落合 静一

くれがた 白い花はしぼんで 匂だけになる
どこからか夜がすべりだし 庭はすつかりお
そろしくなる
くらいところから出て行く人 残された部屋
部屋は小さくなる 中には蚊だけが居る

ひらがな

ひらがなはこひのあしあとか
ひらがなのてがみをよんでゐると
そとをちやるめらがとほつていつた
まもなくゆふくれがやつてくる
ちやるめらよ、ゆふくれのまちなれよ
ひらかなのてがみをかいたあのひとも
きつとおまへのうたをきいてゐるように。

秋・朝の哀愁

木下 夕爾

みづはみがきといつしよにのみ下した孤獨に
しみじみと胸がいたい。

※

いつも宛名のない寂しさをどうしよう。
やりばのない季節の戀情は
せめて青い封筒へ封じようけれど、

※

白い服でつゝんだ體に、とうめいな秋が冷え
る。
こんな日には、ひとりで、いすばにあの空の
映つてゐる公園の石庭をあるかう。
ねえ ふんするよ、

君も僕も、空しい情熱を打上げる事に
こんなにも疲れやせたではないか。

※

とほく 忘れた筈の思ひ出が

いつのまにか附箋を貼られて胸のなかへかへ
つてゐる。そしてそれが霧のやうに僕を泣か
せる。

こひびとよ、あなたがくれた花束は
もうこんなにしぼんでしまつたが
僕は いまでもその捨場に迷つてゐるのです

夏と秋と

橋本 虎二

I
透き通つた水の底に、合歡木の花が咲いてゐ
た。オーイ、小さい木霊がして来た。私は哭

きながら家に歸つた。私は合歡木の花の着物が欲しかった。

II

鈴をならして峰に行く花嫁をどんなに憧れたことか。私は白い雲に乗つて緑の野を走つた私は星の子になりたかつたから、草に寝て、ギターの音を食べた。冷たい露が遂にあをい星の子にして終つた

III

梨の花の垣根と夾竹桃の葉陰があつた。白い大きな胸と、赤い暖い乳房だつた。私は杳いお母さんを想ひ出しながら白衣の人の口づけにむせんた。

IV

言葉がなかつた。みづ色の空の大きな曲の端

に四つの瞳が笑つて離れた。

V

秋が玉蜀黍の葉を揺すぶつて一散に走つて行く。木も家も浮び上つてゐる深い故郷の空だつた。

私はもう星の子ではなかつたから、細い腕を空にのせて星の輝く夜を待つた。村祭の笛が山に一杯秋をまき散らした。

たそがれ

稻垣 勇

貧しいひとと花のやうな幸福でつゝんでやるたそがれ

戀傷を思ふひとの心の中にしみじみと淋しい灯をともすたそがれ

ふるさとを忘れたひとの上にノスタルヂアをまきちらすたそがれ
母のないこどもや玩具のないこどもに鳩笛のやうにせつないたそがれ
私は少女のやうなたそがれのやさしい頬をそつと撫でてやりたい

私は一日の中で一番悲しいたそがれの幼さい時からの話が聞きたい

ふるさと

渡邊 孟次

ふるさとは とのさまの匂がする とのさまの庭には 赤い鳳仙花が咲いてゐる。

ふるいみちはいまでも人が通る 昔のひとのしろいおもかげも 行つたり 來たりする。
あをい水の流れる川がある 朽ちた橋がある 橋の上に見えるいむかしの足あとがある。
橋のむかうにも ふるいみちはつづいてゐる しろい石がたくさん落ちてゐる。

僻村の黄昏

柴 全之介

よれよれのねむり木の向ふにそつけなくつゞいてゐるほこり路 ねむり木がしづかに白い

晝の夢をとちる頃 風とゆふぐれは路の彼方
からつれ立つてやつてくる

葉鶏頭のいつばい生えた裏畑で 薄れた陽の
光をくゞつて犬が紙切れの様な鶏をおつかけ
てゐる

ひつそりとゆふぐれの中に夜を吐き出してゐ
る空のらまや、積つた馬糞にかすかにあをく
蚊がたゞようてゐる

火のないつめたい秋のゐろり そのそばで
冬物をつくるつてゐる老婆はかなつんぼ
壁の上の古い浮世繪と黄色い維新の寫眞には
いつも黄昏が錆びついてゐる
やがてみんな野良から歸れば ゆるい風の上

どみのひとつひとつに電燈がうすくともつて
くる そして 小さい村は土に沈んであたゝ
かいひかりやひいきやにほひでいつばいに
ぎやかになつてくる。

秋

木下 卓爾(東京)

白いまど

白いはと

秋は白いまどから白はとのやうにかへつ
てくる

風にゆらめく白旗は青い空の涙か

秋の楽譜がしつとりとぬれていつた

睫毛から足を垂れる秋の少女は
とほい野末の煙のやうにはかない

憶ひ出は白いまどから白煙のやうに
にげてゆく

白いまど

白いはと

秋・母斷章

丘山 静樹

その一

母は夕焼空を唯一の宗教とした

油のやうに重い

くぼんだ眼を見はつて

静かな淋しい夕焼の色と匂ひに縋つたのだ。

幾多——子等の愛の叛逆に

再び孤獨の人生への

拋物線を投げる母ではあつたが

あゝ古ぼけた版畫のやうな

落葉の頃の夕焼に

先つきから、しがみつく

母の瘦せ細つた影がある。

その二

窮乏が暗鬱な影をひく
私達の生活よ

物質の黒い手が
とう／＼母との間に
愛の遮断機を下してしまつた

蒼白い不幸しあはせが
生れ乍らに母の肉體を蝕んでゐたのだ

母よ！
私の心は氷のやうに冷たく、さぶしい。

十月のほゝえみ

中島久代

ぶらーらん ぶらーらん
稲播機いねまきのうなり
架乾のすんだ稲が車の上をすべる
飛びながらすべる
藁の亂舞！
扱かきの散亂！
光線の中を塵埃が浮く
むした汗の臭ひに壓しつぶされつゝ
百姓は働き続ける
機械の様に動く足を

十月の午後の日が輝かす

話なんかしようなんて聞えはしないのだ
百姓は足の疲労も忘れて

「今年は稲がよう出来た
これがだ 白いままままになるんだぞ！」
ひからびた百姓の顔が、手が、足が

青空の様に朗らかに微笑んだ
(日頃のかなしみも皆んな忘れてしまつて)

植民地

廣田慎一良

こう・こう・こう・こう・哀しくなくて 仲よ
くないで 高く・高くとんで 南へ去る雁よ

いつとうしりの 雁が こちらの秋を さら
つて行つた。
みづ色の空に 小さくなつて 見えなくなつ
た。
ふるさとの 母の すくない髪に 封筒のや
うに白い みんなの羽根が ふるのだらう。
雁・雁・わたれ たつしやで わたれ。

冬

小暮妙子

垢によごれた髪をたばねて

すりへつた下駄をひきすりひきすり
雪の夜道を娘は歸る。

カラのべんたら箱を音させて
しくしくと寒い風を

古いシヨールでよけながら
工場の雪明りの夜道を歸る

娘はかすかな聲で労働歌を

白い息と吐き出した際に

母と娘を捨てて

いづこへか旅立つた父を

正月も來ないむさくるしく貧しい家を

思ひだしてゐた

——お父つさん、なぜ貴方は可哀想な

お母さんと、この弱い私をすてゝ出てい
つてしまつたんです！

お父つさんがゐなくつたつて私はその日
暮して貧しさと戦ひ乍ら、お母さんを助
けて行きます。けれどお父つさん、私は
わたしは貴方を恨みながらも寒い冷たい
布團にくるまると、お父つさんの身を案
じ、そして戀しくなつてならないん
です。

娘は凍つた顔を

かじかんだ手の中におしつけて

自分でも判らない涙を流してゐた。

蛙の詩

細川 昊

どつかりと大地にこいつはヘソをくつゝけて
なんと素晴らしいガンバリやうだ。

睨睨するマナコ。

だが こいつは地主ではない。

數億の同志をひきつれて

叫ぶこいつの姿を見たか。

こいつの素晴らしい飛躍力の潜在を知つとる
か。

こいつの生活は決して地表をいでない。

百姓と共に土に生れ

土に育まれ

そして どつかりとガンバツたこいつの姿。

俺はこいつの腕に 後肢に

土のにほひをぶんとかぎ

力強い百姓の

生活に戦ひ 戦ひぬく姿を見る。

新聞

能瀬しげる

颱風を暗示する雨は日本を蔽ふ——私は新聞

を読んでゐる

鳥潟博士令嬢の結婚解消問題を報告する
北海道水害凶作地哀話が涙なしに書いてある
国際法は日本だけが正義である

……

新聞は平板な現実の報告書

※

だがよく見くと深く高いところの抒情が
ザラ紙に黒い文字の詩を書きて
人類、愛慾鬭争の歴史の一角が見える

機械的に作り出された新聞紙一杯に
血だ、血だ、生々しい人間の血がにぢんでゐる

る。

裏をかへし、裏をかへし——私は新聞を讀んでゐる

日記を綴る

松田 勇

びしびしと端的に一日を綴つてゆかう
糸のやうに瘦せた神経質など
闇に吠える野良犬にでも喰はれて了へばいい
だからだとして盡きぬ文章を私は好まない
『人生』がこのやうに思はれることは
私をたまらない憂鬱に引き入れるからだ

過去のことはいつさい書くな
泥濘の如く汚辱された過去に
如何ほどのあがひがあると云ふのだ
ぶつぶつと呟くのは止めよ
一日は一日で終らせて了ふがよいのだ
人生が一本の『骨』であるならば
それは何と嬉しくも愉快なことであらう
——私は日記を綴る
その一頁に人生の相貌を鋭く凝視して
ペンよ！腕の如き逞しさを以て
今日の一日を叩け

凱旋兵を迎へた街

南雲 幸一

幾萬の群衆は凱旋門から凱旋門へ
鎖になつて昂奮した
鏡のやうにきんきんする空気を押し切り
押し切り、喇叭は勇ましく進軍する
と、幾萬の小さな太陽が
萬歳の怒濤と共に亂舞する
黙々と兵士は哀しい戦友を想つてゐるのだろ
滿洲の空気のへばりついてゐる顔が
いくつも・いくつも・ふゐるむの連続……
バンザイ
バンザイ
萬歳は機關銃のやうにクサリを縫つて行く。

短 刀

泉 千秋

朝の鏡の中で私はキュツと顔をしかめる。
そして少し濃すぎた口紅を思ひきりなめまは
す
水白粉のついたおくれ毛のまゝ劇しく頭をゆ
する。

それでも瞬時だけでまた現実にかへる。

いやな奴、首にでもなつてしまへ。
平和だつた私の大事な感情を亂さうなんて、

そんな大それた事をするバカ
投げられた花束なら喜んで拾ふ様な私に見え
るのかしら。

じつと唇をかんでコールドクリームの眞白い
びんを喰入る程見つめてゐたら、
鋭いきら／＼光る短刀がたまらなく欲しくな
つた。

私は昨日洗面所の高いスリガラスにきれいな
青空の映つてゐるのを見たのに。

春の感情

鮎貝邦子

ビビビ春の鳥がなく
ビビチビチ明るい春のすんだソング

どつかに幸福が生れてでる
春の小鳥ら……
どこかに幸福が生れてきてる
春のひとのこゝろら……

あした、鏡を拭うて微笑する
若い私。
さうしてまつかな唇に春をおもひ
すんだ瞳に遠いひとをゑがく。

なにかしら美しい感情が
ふくらんできた白い胸にわいて来る

とてもすばらしい透明な
春の此頃の魅力。

ビビビ春の鳥がなく
きゝすます明るきゆたかなる心。

海嘯のあと

笈川光夫

母のふりしぼる悲鳴ぢやない。
しづむ弟の、泣き聲でもない。
昨日のまゝ、そして何時迄もつゞく波の音な
のだ

むしりつく様にひゞくのは地獄をくぐつた私

の心臓なのだ。

ホーイ　ホーイ　誰か遠くで人を呼ぶ聲がする

月が陸に打ちあげられた船を、荒れ果てた戦場のやうに蒼白く照らしてゐる。

母を呑んだ、弟を呑んだ、そしてもつと多くの人々の生命を呑んだ海。何處へ行つた。

月光に神の様に輝く海ばかりがある。

又、今夜も私は、飢も寒さも忘れて、倒された松の根本にうづくまつて、ちいつと月の海原を見つめてゐる。

コンクリートの橋

飛鳥井文郎

巨大なコンクリートの橋にさへ

砂埃といつしよに

なつかしい哀愁がかゝつてゐる。

都會の薄暮！

疲れて歸る私の眉に

ほのじろい燈火をともして

呼びかける橋のこゝろよ！

橋をわたるとき

私はいつも――

らんかんに倚りかゝつて

橋の下の流れをのぞく。

そして白いコンクリートの橋から

とほく――ふるさとの河の

かなしいにほひを嗅ぐ。

進水式

島田律夫

喚聲が銅鑼の様に鳴つた

もれあがる浪をおしきつて

新装の彼女が晴れの門出日だ。

廢船の數々が

涙の様にほろ苦い潮に嚙まれてゐる港で

明るい空のやうに

彼女の容姿は白い幸福の塊だつた。

興奮の浪が大きくゆれて

三月の空へ和んで行つたあと

私は群集の心にそむいて

遠い不幸の日の後影を追つてゐた。

くれかた

別枝房子

あゝ菖蒲よ、それはらふ製のリボンか
緑の素直さよ。

静かにくれの迫る夕べ綺麗に整理された、
田に、満ち充つ平和よ。

その一隅に静かに香氣を放つみどりのリボン
それは聰明な貴婦人か、そして素直な美しさ
そしてらふ製のリボンはボキツと折れて
香氣が一面に發散した。

うすやみがたゞようて暮れゆく田圃よ。
私はよろこびに泣いた。

そして静かに頭を垂れた。

暮色にみどりの高い香りがとけて

私は静かに歩いた。私の今日一日は終つたの
だ。

五錢の生計

竹月 冬

ツーンと更けた夜が舗道にしみいつた
そこに立ち並んだ父と私
賣れのこつた西瓜をくふ。

かうした時

しみじみと生計なまはひのさみしさを甘露つゆの中に味つ
たのどへまざまざ五錢玉が溶けて行くんだよ

一日のみいりを終へて、ひと切に
父は限りなく、實に限りなく幸福を喫してゐ

るのに、私はなほ
貧困をかみしめてゆくのです。

私は客でありたい。

さうした時、父の幸福はもつと歡喜にみちる
だらう。

はるか

十月の下

うみなりは

一年前の有福を私に思ひ出させようとする。

舗道は蒼白くふるへてゐる。

孤 愁

坂 博人

一日の勞働を終へると

その頃——高原はらのすつと涯は

暗く溶けて星の中へ消えていつた。

『おうい、歸らうぜ』

ツルハンが肩先に淡く光つて歸路に揺れると

うらぶれた感情のかづ／＼が

銷骨のあたりでゴソリ吐息をもらす。

剝ぎさられた情熱

知つてゐますかK子よ、私は遂にあなたに愛されなかつた。——あれからもう五年

(あれから五年今も、私は、十五時間の苛酷な使役に牛のやうに忍従して灰色の想念を咀嚼してゐます。)

おゝ、慕はしい白いまるい月
いづこにおはすか幻の母を
今宵も、私の心に忍んでよぶ。

あゝ

感傷の枯渴した汐干あがつた胸間
ことり、心臓の底から哀傷がよみがへると
ツルハシを抱いてじいと佇む私——。

叱
る

黒木 清次(宮崎)

芭蕉の葉がゆらとゆれて
その中から洩れて来るやうに
遠い淋しい汽車のひびき
町廻りの樂隊のやうになつかしい
汽車のひびき。

果てしなく、果てしなく
私の旅心すらゆりさまされて行く。

旅がしたい——

妹の口をすべつたこの尊い言葉を

むさんにもふみくだいて

せめて楽しかるべき晚餐すら

妹にあたへなかつたわたし。

けれど——。

妹はさからはうとはせず

たゞうす暗いえんさきに坐して

すつかり情熱のもえつくした

娼婦のやうに

わびしくも襟足をみだしてゐる。

番
茶

柴田 信義(大阪)

香ばしいにほひのする番茶

ふつふつと吹きながら

飲むと

宇治の茶畑で緑の空気を

横縞に織る音律

縦縞を織る旋律が

今! ぼうと立土がる熱いゆげに溶かされて

僕の頬を温たゝめながらよぢ登つて行く。

あゝなつかしい!

何と言ふ懐郷的なにほひだらう

こゝろよい感觸だらう

眼鏡の白い幕が秋風に誘はれてしまふと

西のあかね色の空は

煙突から出る煙まで

番茶の色に染めてゐる。

あゝ番茶色の西の空!

何處からか細い線の音律が

番茶のゆげを慕つて来る

ふツふツと僕は番茶を飲んでゐる。

處女地

大貫 博

おつべしがれた樂器のやうに、

ぼろん ぼろん 音をたてゝゐる村

古傷のやうな村人の眼は若しい純情をくり返すことにもみ疲れてしまつたのだ、

山も、森も、生計に蝕まれて今冷やかに拓かれてゆく――

明るい處女地?

もうこの現實に祕密は無い

あの青空に飾られてゐた生活の期待は落葉と一緒に地に墮ちてしまつた

ユートピアは夕焼のやうに美しく、もろく最後を告げ、そして村人は村を毀すことを唯一の反抗とし、生計とした。

村人はたゞ「絶望」を平和な夢として楽しむやうになつた

てうなの音

橋瓜佐和子

山門の大いなる樟のこもり葉もれて

てうなの音は、カーンカーンと

高く尊くおごそかに

清みわたり深秋の空氣をふるはせて

材木を撃ち、ひとの魂を撃つた

街の喫茶店

横尾與惣次

くちなし色の夕陽に濡れたわたしの魂は

亡き母の聲を聴く

なつかしき胸の思ひ出

なやみとよろこびの生

安息の未來の死

あゝ、お母さん!

しみぐくと溢れる涙 静かなるさゝやき

夕暮

腕時計のグラスに星座がある

電氣看板が手を舉げた、大きく

喫茶店

雨ざらしの立體幾何

街の標式燈臺

温い珈琲――養母の慈愛だ

蓄音機は遠心力の媚を投げ

改築の御堂のうしろの松山に
こだまするてうなの音

炭酸水の泡から麻訶不思議な氣體が立昇る
あの娘、何を笑つてるのだらう
温い模型のやうな彼女たち

人々は昆虫の本能でここへ集る
飲物ぢやない、氣體をのみにくるのだ
驚くべき乳白色の蠱惑！

冬は

能瀬しげる（北海道）

また冬がやつて來ますね
よその女みみたいな貌をして――

冬はメノコの眼窩の青い極光です
冬はアイヌが壁に掛けた鮭です

冬は
私のほんのわづかな營みの脅威です
でも冬は一つのなぐさみです
くだらなく生きてゐるのを悔いる心も貧ゆ
ゑに裏切られた愛憎も
みんな埃のやうに白く働かないからです

冬はまた
くだらない詩をたくさん書くことです
古い詩の本を引き出して讀むことです
せめて掌を温める青磁の火鉢がほしいと思ふ
ことです

それも仕方ないとあきらめることです
そして生きてゐる自分をたまらなく愛しく思
ふことです

メノコの情熱は青く温いといひますが……
鮭は博物館の壁のやうに冷たいといひますが
……

また冬がやつて來ますね

驢馬

鹽澤仁三郎

——ある日自作の詩の拙劣さに耐へ難

き折に作る――

驢馬は新月をたべてゐる――

ちよろ／＼と流れる水彩畫のみづに
繪筆を洗ふ畫家のオナカで
ドーボンドーボンと正午の鐘が鳴る、
ミレーの貧困な顔が新月をたべる、
畫家はミルクと、バターをつけたパン、
畫家はかすかに顔を歪めた
クツクツと冷笑たい雞が胸の中でをどりだ
した。

畫布は白晝の微睡を抱へてゐる、
畫家はあくびをかみしめ、かみしめ

己れの毛をツーンとひとつこぬいた
それは、かすかに青春の匂がしたが
驢馬は新月をたべつゝ
みむきもしない。

國民

木山鷹夫

なにひとつ出来ないのです
なにひとつが覚えられないのです
なにひとつが解けないのです
なにごとも、なにごとも、こんぐらかつて解
らないのです

ひとりぼつちで大勢の、大勢でひとりぼつち
の

國民です

氷柱芽吹く

雲井好男

透徹るほど冷たい光線の觸手に脅喝されて
性を失つた瀝青土には
白い蘚苔が蔓延に躊躇つてゐる
空虚な朔風が絶えず吹き暴れてゐる廢屋のや
うな胸に

ひとつ點る灯を
落付けない燈心に庇佑ひながら凝視してゐる
私は
不透明に白い蘚苔に
間もなく、澁色を見出すことだらう
檐軒に涙が凍つてゐる

私は灰汁色の畫仙紙に
ぼつちり畫かれた蒼昊を眷戀る

記憶

財前義見

星の殞り交ふ空の階段で
白い肢體が撒亂する 星座の祕密
白い山頂の天文臺 その上の螺れた貝は
回想症 遙かな距離に當惑する望遠鏡の
涯での潜航艇 學者の白い頭腦の中で
はるかな三角州に散在する化石の符號

白い洋燈にこぼれちる白い祝祭の哀愁譜
白い海塔に旋回する鷗の翼に墜ちて來る
仄かな白晝夢の白い觸手 海に展開けた
四角な窓で 白い少女のパラピンの髪に
故園の白い雲を聽く

仙人掌の上を吹く王妃の憂愁 沙漠の晝月に

濡れひびく幽かな海嘯は 杳かな距離へのノ、
スタルチア、ぼくは記憶の木靴を穿いて 白
いパイプを散歩する

阿片

しにち・さとう

階段をのぼると林檎のみがあるんだ

林檎は夏に翳す 陽の色なのに
夜光蟲がひろくくる

(少年はかげでみくふことが好きなのだ)
夢はどこに——夢の世界で
ぼくはどこに——ぼくの世界で

ぼくは言ふんだ

窓をあけると 夜光蟲はひだまりか
ぼくの残された壺に白雪の思念が綴る

——悔恨——

イニシアルな二字が遠のいて ぼくのネオン
にかゞやきのこるは

——階段をのぼると林檎の實があるんだ

掌

——私は二つの掌を愛してゐる

母に似た形を持つ故に——

松村美生子

ときどき灯影近く

私は掌をかざしてみる

けしの花はあかあかと

いつばいにさいてゐる——

散ることのない罌粟は

つねに私の掌の中に咲いてゐる

家

古川 嘉一

らむぶを圍んで

昆虫のやうに集つた家族たち

人々の悲しいいとなみが

音をたてないやうに着物をぬぎはじめ

せめて美しく生きたいものです

せめて短かく生きたいものです

せめて謎の儘生きたいものです

父の胸壁よ

母の運命よ

家はとんぼのはねのやうな歴史を持つて

家はとんぼのはねのやうな愛情を持つて

家はとんぼのはねのやうな悲哀を持つて

矛盾だらけなのです

それでも

夕ぐれの村々に

お喋話のやうに立つてゐる

家です

健康は

故郷を持たない十の櫻貝を形成し

蒼穹を識らない十の蠟月をやどす

明り窓に倚り、しみじみと

私は掌をのぞく

外の光にあきらかに映し出された掌の條

切れてゐる生命線を氣にして

永いながい時を過す

やがて亡姉のあとを追ふのか？

だが私は母に似た掌を限りなく愛してゐる

今、罌粟は美しく咲いてゐる

掌上の條は果して的確な豫言者だらうか

私の寶玉

五月女雪枝

私は多くの寶玉をもつ。
夕ぐれ。

とぎすました白い米が、

指の間からきらりと光る時、

綺麗だなど私は思ふ。

手に握つて

ばら／＼砂のやうにこぼすと、

その一粒一粒が、

みんな夕ぐれの匂ひにそまつて

透明な寶玉になる。

私は夕焼の空をもつ、

あかね色が次第にぼかされて果は白い海にな

る。

私の寶玉に

流れゆく雲もある。雨あがりの虹もある。

新鮮な朝もある。

そして、それ等は大きな自然の寶玉箱に、

みんな入つてゐる。

出帆

伯元一郎

こんなにも

シャツボを振つてハシヤイであるのに

海は涙ぐんでゐる

×

こんなにも

もう見えなくなつたのに

思ひ出はまだ海と別れを惜んでゐる。

ひばり

中村 要

形のない——銀のスズが鳴る

夢を見る心の底で

明朗に——快活に——

清水の幽韻か……

言葉を言ふ黒い瞳か……

戀の口笛か……

晝寝の夢か……

薄色の紙に

スツキリと描かれた
銀色の細線が
キラ……キラ……キラ……

心の限り
春を鳴き綴る——ひばり

黄 昏

町 純 造

——哈爾賓にて——
辻で封切煙草を商ふ
老いた露人の胸の上で
手風琴はすくけた音をたてる、

きこえない蹠音

夕暮はフアラヒン紙の上に落ちた果汁、

手籠をさげた支那人の物賣り
呼聲はセピア色にけむつて
風景は少年的である、

狭い傾斜の路次に

白いランプ

白いランプ

古びた部屋で

鳩時計は故障を起してゐる。

碧天の詩

福 富 武 人

澄明な午前のフィルムに
勇ましい軍犬の歩武。

無音帯近く
硝煙は亂れて、

煌く太陽の
その一角は撃抜かれた。

——今、

風は日本の
領海を一齋に
渡る。

瞳

大 倉 芳 郎

美しく 開きたい
愛情の玻璃窓

楽しく 知りたい
感情の十字路

瞳——

お前は
生々として
憧れてゐる
常に
而も
まだ見たことのない空に
青い傳書鳩となつて

黄昏の寒村

後東優一
ブブ幌馬車の喇叭のなかに
小さな村人達の晚餐がある。

白い貝殻の路にへんぽんとひるがへる、
たそがれの幸福。
けれど燠銀のやうに掌は重たい。
たそがれを取巻いて洋燈のやうに、
貧しい生活の悲劇が生誕するのです。

ブブ喇叭の哀唱に送られてあはたしい
晩春を
昆虫のやうにじいと聞いてゐる村人達です。

列車

巖 土夫

宇宙は夜々かうかうと私の中に冴えた
放らつなああの圓心に
ひらめく惱みは

愕然と、

けん命に走り出す時であつた。――

流木

岡本伸夫

今日も濱に寂しい流木の漂姿を見た――
杳い、あちらの妖奇な物語を
色褪せ爛れた廢軀に秘めて

白紙の様に色の喪い流木の視野――
愚鈍な潮の間斷ない嘲戯に
土色の水臭い思念に打摧かれて

ヒトツ――フタツ

濱は今日もまた雨

仕事の失い空虚な心臓を流木に擲げて

ひとゝき

フリユウト吹く南の娼婦の

爛れた記憶を痴呆の様に手繰る……俺。

若年

木山鷹夫

鏡に

つり上つた眉をみつめてゐる

皺がよつてゐる

その眉根に

思想が田蟲のやうについてゐる

ひとすぢ、ひとすぢの皺よ

皮膚よ

あゝ

お前は、貧苦を知るだらう

貧苦！

耐へ得るだらうか

お前の、濡れた瞳が

若年よ

文字盤・歲月

沙々木

抄

夜更け。

私は街角で、鳩の啼聲を聞いた。

私は掌をひろげて數へた。

しかし、それは私の十指を外れて闇の中で啼いた

(あれは、鳩時計であらう。行衛知れなくなつた十一歳の妹のやうに……妹の海緒のやうに。)

夜更け。

私が立ち溜ると瘦せた海緒の顔が見えて来る。私の身邊に。

私の眞上の星座の中に。

混血兒

しにがく・伸

ニッポンよ

檣によりそつて来るうすい水色の山山が見えてるよ

ニッポンよ

波止場はみんなして呼ぶ父さまの國、母さまの國

ニッポンよ

ニッポンの家々の壁に長く曳いてみた蠟のマ

ツチ

何もかも知つてゐる私

何もかも知らない素振をすることまで覺えた

私に

寝むらないニホンの壁は

白い盲目の地圖だつたよ。

貝 殻

双葉 照(東京)

僕の来た道には貝殻が散らばつてゐた
僕は時折それを思ひ出すのである。

貝殻は通りこしてから光るのであらうか
僕の耳には色々の光が聞えた

なぎさで僕は時折貝殻を洗ふのであつたが
……あゝ、夢のうつらない貝殻よ。

捨てた貝殻に一本の神経を残して

僕は歩んだ。

蚤

浦田 三郎(東京)

新らしい疊——

ほのかに薫る大草原

小人の王国

女王の愛馬、眞赤な小馬!

右に小走り

左へそろそろ

つと息止め

いゆつと、身を引き締めて

さつと風切り

かき消える、馬、馬、赤い馬よ。

コップ——水

井 椎 稔 二

たゞ一杯に狭々こましく
盛られた水

澄明にして、崇高、

今しばし大氣に揺るがず

遊星營々として

闇夜を縫ふ間、——

僕を觸透して

杳かに、近く

怒濤渦巻く大海を運ぶ。

宿 直

雲 井 好 男

ランプが階段を昇つて、階段は私の背後に崩
れ軀ける。

聲音の止絶えたところに鍵と時刻と静寂があ
つて

カアテンの隙間に淺黄色の街が眠つてゐた。

私はランプにつれられて、幾つもの部屋の羅

馬數字を、巡視時計の鍵穴につめこんで歩いてゐる。

坂道

熊谷芙久子

いつばい樹のある
ゆるい坂みちは
みんなが なつかしむところ。
書くことの許されない
その日 その日の。

坂道に やがて、夕ぐれが
訪れると、
おたるの 港のやうに

灯が パラ／＼と
うつくしくなる。

さか道は
自分の映像を そつとしとして
遠く別れた人たちの
愛情を ひそかに憶ひ起すところ。
だから、
坂道を歩くと
嵐のやうに いゝおんがくを
聞きたくなるのです。

白系露少女

龍河洞一夫

雪、雪の降る白い港の異人墓地を
今朝もさぼんの香は北を向いて流れ
白系露少女の郷愁はスカートノースカートのの襷から
冷たい十字架の肌くちまに接吻する。

モスコウよ、白い白い雪のモスコウよ
鈴がなる、故郷のトロイカの鈴が鳴る
クレムリン・パレスの童話の構圖に
赤い二筋の傷痕を畫いて冬の悲劇の鈴が鳴る

ペチカよ、赫々と燃えるモスコウのペチカよ

白系露少女は丘の異人墓地から
雪の波止場へ、モスコウへ、ハンカチーフを
高々と振つたが
あゝ、廢船の白い羅針盤は
今朝も碧い碧い瞳の中で凍死する。

寶石匣

岡本伯二

埋没した象牙の匣を探しにやつて来た黒人達
青い樹皮の剝脱したブラタヌスの木蔭はまた

博物館の陳列所でもあるのです。今では不動の偶像となつてしまつた熱帯産の毒蛇が神話の葡萄畑にも棲んでゐました。探せ、蛇取りの女達よ、仕掛のあるこのまやかしの暗闇の中を。——そして、どうやらあの石像が怪しいらしい。見かけは立派な大理石の胸像でも赤い血をばく白鳥に追ひかけられてとぼけた詐欺師だ。何にも書かれてゐない羊皮紙さへ時のたつ間に日にやける。あゝ、美しい螺鈿のなかに秘められた夢と、いきを人は知らぬが、斯うして日と夜とが過ぎるうちに縁起紋章は何時かでき上る。

冬至三題

村原 秦

雨

櫻落葉
硝子戸は冷え切つてゐる
鶏がたうとう死んだ三羽共
臺所の隅の壁に
鼻の穴が
だん／＼大きくなつて來た 此の頃

鏡

姿見をふく妻の細い手
陽が當つて居る

頭の重いこの朝
書棚の上に
雨漏の跡がある

額

額を下しつばなしで七日
苺をきらして
朝鳥の渡る空を見て居る

眞珠

納屋 信夫

ぼくはちひさい眞珠を愛す
ぼくはちひさいものを愛す

ちひさいものはうつくしく
ちひさいものは可愛らしい
ちひさいものの影に
いつも幸福のつばさがあり、そして
ちひさいものの中に
いつも眞珠のひかりがある、だから
ぼくはちひさいものを愛す
マーガレットの花を愛す
人形の瞳を愛す
ぼくのちひさい胸を愛す
シューマンのトロイメライを
花片のやうなショパンの小曲を
その中に住む、うつくしい
青い眞珠のひかりを愛す

くれがた

浅野 勝敏

ゆるい風よどみのなかに
ひっそりと息づいてゐる村

葉鶏頭のいくつも生えた庭
糸を繰る老婆はかなつんぼ
せむしの兒は瘤が重たい

薄れ陽のつめたい土藏
痴愚のやうにこはれた空の厩

穂芒のゆれるしろいほそい丘
路に一ぱい落ちてゐる轍の音

錆びついた空気をゆすつて
水車はけふも唄つてゐる

よれよれな路をまがると
村はまたひっそりとする

九頭龍川

佐々島敏夫

朝——勝山町附近にて——
九頭龍川は鐵より冷たく

山脈の雪は忍苦の涙よりちかちかと輝く

今日もぼろんぼろん鳴る釣橋を越えて
女工等かひせうらは娼婦のやうに陽を眩ゆがる
どの小路も織機の音で麻疹のやうに慄へ
捨てられてゐるのは糊みたいな過勞だけ

あゝ、魂より先に神に召された人々の純情よ
拭つても、拭つても消えぬ指紋のやうな宿命
——今は夕焼を唄ふべき歌さへない

夕べ——九頭龍は死よりも強く
叢林の彼方、星は風のやうに揺れてゐる。

横 顔

和田 秀子

あのひとは季節をパイプにつめて
ひねもす海をきいては
幼い火を点ける

誰かゞ書き忘れた壁の文字から
夕暮の早い街の屋根裏ギヤレットから
あのひとは秋を抱いて
孤獨な思航をつゞける。

指が夜更を告げると

あのひとは星を背負つて歩いた。

北の共同墓地から

荒れた踏切の蔭から

とぼしい敷藁をのべては

あのひとは朝を迎へた。

月 蝕

青野 俊雄

1

小鳥たちの騒めき。夜がその中に落ちる。

樹木の中の秩序のやうに、私は小鳥たちを見失ふ。

2

沈降する夜の軋き。私は忘却の底にその軋きを追ふ。私の中の小鳥よ。

3

私は扉を閉す、扉の外を流れる喪失の海。

私は忘失する……音符のやうに、小鳥たちの杳かな巡環を。

私の音符よ……

冬

晶 玲子

ほし藁の影に冬がひそんでゐる。

その冬の影に又私がひそむのだ。

ひねくれた感情をこだしに、こそくと

生きてゐる卑屈な根性をたゞき直して、

此の荒野のたゞ中に永い一冬を抛出して

おいたら

少しは世慣れた魂になるだらう

それとも

自分だけの自分をいとほしんで

永遠に一人の眞實と生きようか——

ひなたくさいほし藁の、荒い肌ざはりさへが

何か嬉しく感じられる今日

世にすねて生きる我が身も

あゝいくらかは伴せなのだ。

船窓のある酒場

龍河洞 一夫

せむしの老婆のやうにうづくまる

ひしがれた場末町の夜更け

船窓のある酒場で

古びた楽器は暴風圏の號笛を鳴らす。

よれよれの路地にしぶく溜息は

燻銀の月をくるんで

夜空はベッドを賣る娼婦の額で

深海の怒濤のやうにゆれる。

あらはな裸形に救命綱をまいて
待ち侘びる娼婦たちの胸で

毀れた鳩時計は

算へ折る歲月の指を杳くはづれて鳴る。

今夜もまた聾啞者のやうな夜空へ

酒場の船窓を開いて

宿舎を忘れた傳書鳩を飛すのか

おお 場末町で沈む娼婦たちよ。

霧の黄昏

守 哲朗

夕ぐれ……

ひっそりと霧の生れる村がある。

名の知れない花は白くぼやけて

もう何も見えない霧の向ふに白い道が見える

とぼく、道は呼んでゐる

たそがれの向ふから、白い手を上げて。

白い道の彼方から歩いて来た、夕ぐれは

この小さな村をついで

仄かな灯が、ゆるい風の中に

よどんでゐる。

白い花が、白い晝の夢をとちて

黄昏の村は、しつとりぬれてゆく

匂ひをはなつ金色の星明りが、降りて来るの

も、間がない。

砂丘

和田 秀子

深夜

日向野新助

月が砂丘に降る夜は

海鳴りのすがたが杳い

とぼしい季節の葉裏と

ひもじい裸の吐息と

そこには

明日を呼ぶ影さへも見えない

町の船室を抜け出て

一匹の蛾となるひととき

潮の香も潜んで

貝殻の白さも讀めない。

砂を噛む心に凭れて

ふりかへる術も知らない。

君はひとりぼつちでゐる

君は火の消えた世界に立つてゐる

しかし君は泣かないでゐる

雲が白く月の光をのせて浮んでゐる

詩人の君は何時かどこかで一瞥した
白い少女を想ひ出す

星が宇宙の何處かに輝いてゐる
金の光を惜げなく放散させながら
哲學者の君はそれらの星の向ふに
神を見出す

君は子供の詩人であつたはず
君は子供の哲學者であつたはず

青い世界と影の世界のまんなか
ひとりぼつちでゐる君の姿よ

推移

岡本晴雄

海流がその砂丘を濡らし
暮色の荒い傾斜を匍ふころ
すでに 夜は私の胸臆を埋めた。

隕石の恐怖を跨いで
洋燈の明るい化石の中から
私は 果實の光彩に夜毎つかれた。

粉飾の褪せた私の呼吸は
ひとり敗北の標本に溺れる

そのころ 闇は陽時計の眠りをみつめた。

壁は沈黙で呼掛け
濃霧の氣配が背後に寄るところ
私は、秒刻の歩む階段に伏すのだ。

外人部隊

悲田院 茂

淋しいくせに
みんな朗らかな兵隊です
沙漠の果てに血のやうな太陽が沈んでも
彼等は泣かないのです
(彼等は思ひ出す故郷が無いから)

若いくせに
虚無と頹廢をかみしめた兵隊です
夾竹桃の花かげに聖母のやうな少女を見ても
彼等は驚かないのです
(彼等は女に裏切られつゞけて來たから)

大ぜいのくせに
一人ぼつちの眠りを眠らねばならない兵隊で
す
デスペレートな臨終を熱沙の中に見出ししても
彼等は後悔しないのです
(彼等には遺書を残す子孫が無いから)

秋刀魚の村

後東優一

入江の片隅に追ひやられてしまつた村。葭の蔭で冷たく秋刀魚の匂と共に生れてきた村。くづれるやうな山の間の入江から、半巾のやうにちぎれた鷗が飛翔した。秋刀魚の匂を背負つた鷗が。

悲しい歴史の翼を持つた鷗。

銀色の掌を持つた蠅達の白い身。口笛を吹いて蠅は季節と共に村に集まる。それでも高臺の分譲地だけはいつも白い光が流れてゐた。かすたねつとの様な聲をしながら歸つてくる

漁船。漁師の眼には兇器をひるがへして、聚雨のやうに通り返ぎた魚群がゆれてゐた。たそがれは秋刀魚の匂の中から生れる。たそがれは村人達にかなしいあきらめをしひる。ばらびん紙の様な家々の海鳴。胸に吊つたらんたんの消えるまで漁師は潮騒の花蔭にゐた。

高原

玖島正名

そのころ、高原の静かな水溜りに暮色をのせた白雲の姿が揺れてゐた。

夕陽は、季節の傾斜面を這つてゐた。

鳴きおくれた茅蜩の一群が
乏しい臉に、やさしく囁いてくれた

それから幾たびか

烈しい夕暮が、歴史の夏にめくられたが

街角の窪みには

もう高原の匂ひはのぞかれなかつた

わたしは時折、西向の窓をひらいて
流れ雲のところに話かけるのであつた。

暗い窓

多賀一郎

曇天の下に
瘠せさらばえた河岸が
長々と蠢く
吐息を吐き吐き
船のかけらに蟹等
黒き窓を作り、赤き旗を懸け
かすかに白き白き一抹の煙を
飯粒を付けた鬚等

かさこそと
船のかけら等は動く
黄い灯等曇天を流れ
吐息を吐く夜光蟲等
都會の憂愁に置き忘れられた
むくつけき群。

秋のほとり

玖島正名

そして夜毎、額を一つの闇が流れる

古びてゆく夜の窪みに凭れて

滴るまゝに宿命をまかせ、微かに杳く私は蛾の羽搏く音をきいてゐる。

爪先に似た夜更けが、乏しい足裏にからむころ、埋もれた落穂の夜話があつた。

そのころ、星あかりの小徑に沿ふて

誰か知らない人が、黒い文字を落して行つた

私はひとり白い季節の手首から

しつとり洩れてくる雲の蹠音をききながら葉脈の翳しだす幼い表情を凝視めてゐる。

海岸

悲田院 茂

貝殻と魚の骨の怨霊が

めらめらと燃えあがつてゐる砂の畑去勢された男のやうに

綿の花がかなしい。

れの日暮を潜りながらあたためてゐた。

花はたびたびうなだれ、秋は背戸のあたりにとどいた。

山脈は頂きに雲を呼び、やがてちぎれて、雲は、馬鈴薯の掘取られた畠に影を落してかくれた。

娘も、わたしも、汽笛は美しいひびきに思はれ、まだ、一度もきいたことがなかつた。

日毎、かぜはひびわれ、冷たく、村道はひきしまつてつゞいた。

山にある日

岡本晴雄

僕は風化する肉脛を砂丘にさらし
水平線の汽船にパイプの火を借りる
——下敷になつた貝殻が呼ぶのか
しきりに僕の名を呼ぶものがある。

海に傾いた瘋癲病院は
海月のやうに陽炎にゆすぶられ
女が吠えてゐる窓のあたり
顔れた夾竹桃が燃えさうに咲いてゐる。

わたしは、街へのあてどない思ひを、草いき

わたしは娘の群に働き、縣營の植林に疲れた山は高く、少年は街への思ひをこがした。山肌、明るく、娘達の唄は流れた。

部落

玖島正名

いろいろな星のすがたを嘘の裏におもひ泛べながら私はその部落を通りすぎた

そのころ、部落は月光をいつばい浴びて夜の底に静まつてゐた

わたしは村境に近いとある里程標の麓で、見

すごしてきた人の言葉を流れる雲の表面にしたためてゐた

そのとき闇の奥から部落へ傾いてゆく水の囁きが、耳朶のころをひいてくれた

はぐれた夜鳥が一羽森の彼方へ沈んでいった

私は指に近い母の体温を背すぢに感じながらまた歩きだした

白日の部落

佐々島敏夫

その聳立つ木立の蔭に、暗い乏しい額を集めて、家は崩れかけた石垣にもたれ、窓框は狂咲く日まわりを眩ゆがる——こわれた額縁の様に深い。

そして戸毎戸毎に、水晶の様に滾れ落ちる算の音よ、終日宿命の誦經を節づけ、拉がれた人人の魂に泌み透る。

けれどどくだみの花より悲しい人人の白日夢、ひび割れた貧しい板敷の上に、黒光る柱の數々に、呪縛されてゐるのだらうか、檻樓の様に命を横たへてゐる人人よ。

よれよれの坂を登りつめれば、憑かれた様に

杳い白日の部落、糊のごとき横顔をさし向けて、今日も果敢ない木槿の花が、ほとほと送り迎へる道である。

少女讚

納屋信夫

少女は花を愛します

ところが青い蝶だからです

少女は人形を愛します

聖母は乳ぶさをもつかからず

少女はいつも唄ひます

胸に七絃琴があるからです

少女はいつも微笑ひます
ところに花が咲くからです

少女は文字を讀みません
瞳が夢をみるからです
少女は空を愛します
双手が鳩の飛翼だからです

少女の横顔はうつくしい
額に陰影がないからです
少女のあこがれは消えやすい
眉が夕の虹だからです

干瀉

双葉 照

干瀉はらみの真中にあつた
はだしの足跡がちらかつてゐたりした

茸の芽の青い針に
心の痛む日がつづいた

干瀉は所所に水を湛へて
渴へた心を満たしては呉れた

水溜りには終日白雲が流れ

暮色は潮よりも先へやつて來た

干瀉は私の聽覺の中に冴えかへり
干瀉はまた深海へのみちでもあつた

目の光る魚群が時折
私の網膜に去來した

私はまた限らない思慕を歌にこめ
干瀉は今日も薄暮を呼んでゐる

渡り鳥

佐々島敏夫

それは風でもない。それは雨でもない。黄昏
の一時を樹立のざわめき——それは數知れぬ
渡り鳥の羽搏き。それは忽ち悲しいモチーフ
となり、私の胸に黒い音符をなすりつける。

今日もへらへらの雲に送られて、貧しい町の
額にさしかかる渡り鳥。置替へる事すら出來
ぬ宿命の位置を保つて、彼らはこうこうと同
胞を呼合ひ、目に見えぬいとしみのテープを
手繰つてゐる。けれど葉脈の様な羽の一つ一
つに、北方の哀愁など貯へながら、彼らはや
がて場末から、垂下る雲をかくぐりかくぐ
らねばならぬ。

それは颯風の餘波なのだらうか。北海の波の